

大阪府内地域連携プラットフォーム
2026（令和8）年度 新入生対象 薬物に関する意識調査
（共同 IR 実施報告）

目 次

1. 調査の目的	1
2. 調査の概要	1
3. 調査の結果	8
(1) 回答者数	8
(2) 飲酒の志向	9
(3) 喫煙の志向	10
(4) 薬物乱用問題への危機感・不安感	11
(5) 薬物名の認知状況	12
(6) 薬物の印象	14
(7) 薬物の使用・所持・譲渡への処罰に関する認識	16
(8) 薬物についての学習経験の有無	17
(9) 薬物使用時の症状に関する認知状況	18
(10) 薬物についての情報源	20
(11) 薬物の怖さについての更なる学習意向	23
(12) 薬物の害を学ぶ場	24
(13) 薬物使用者が増加している理由	26
(14) 薬物使用についての考え	29
(15) 薬物使用の現場に居合わせたことの有無	31
(16) 薬物使用等の勧誘経験の有無	33
(17) 薬物使用を勧誘された時の行動	34
(18) 周囲での薬物所持・使用者の有無	36
(19) 友人の薬物使用を知った場合の対応	39
(20) 薬物に関する相談窓口の認知状況	41
(21) 薬物に手を出さないように注意するために知りたい情報	43
(22) 薬物入手の可能性と可能な理由	45
(23) 医薬品医療機器等法に基づく処罰の認知状況	48
(24) 市販薬の過剰摂取も薬物乱用の一種であることの 認知状況	49
(25) 「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を 改正する法律」の認知状況	50
4. 調査結果を踏まえた共同 IR	51

2026（令和8）年 9 月

大阪府内地域連携プラットフォーム

1. 調査の目的

近年、スマートフォンや SNS の普及により、大学生が大麻などの違法薬物に接する機会が身近になっている。

大学コンソーシアム大阪では、大学生による薬物乱用が社会的な問題となる中、会員大学が連携して薬物乱用防止に取り組むため、2020（令和 2）年度から新入生を対象とした「薬物に関する意識調査」を実施しており、2026（令和 8）年度で 6 回目となる。

本調査は、新入生の薬物に対する意識の実態を把握するとともに、調査を通じて薬物乱用防止に対する意識啓発を図ることを目的として実施した。

2. 調査の概要

(1) 調査対象者

令和 8 年度に会員大学に入学した学生

(2) 調査実施方法

- ①各大学において、新入生ガイダンス等で新入生に周知用チラシを配布、回答を指示
 - ②学生が各自パソコン、スマートフォン等にて、大学コンソーシアム大阪のホームページのアンケートフォームにアクセスし回答
- 関西大学は独自に調査を実施し、その集計結果を加えて計上している（性別は除く）。

(3) 調査実施期間

令和 8 年 4 月 1 日（水）～5 月 8 日（金）

(4) 調査主体

特定非営利活動法人 大学コンソーシアム大阪

(5) 調査の内容

調査の内容は、全 24 問 28 項目で構成されている。主な留意事項は以下のとおりである。

- ・今回の調査では、問 14（ア）において従来の設問である有無を尋ね、「ある」と回答した者を対象に、新たに（イ）として「見た場所」を問う設問を追加した。
- ・令和 7 年度調査では、関西大学から質問 1（飲酒の志向）及び質問 2（喫煙の志向）の回答データの提供がなかったため、当該設問の前年比較は関西大学分を除いて行っている。
- ・性別によるクロス集計は、大学コンソーシアム調査のみで行っている。また、性別に関する分析においては、「その他」と回答した者が少数であったため、数値は掲載しているが、分析結果のコメントからは除外している。
- ・自由記述欄において「その他」と分類された記載には、設問に対する直接的な回答ではない自由記述が含まれている。

質問 1 あなたは、お酒を飲みたいと思いますか。（1 つ選択）	
1	飲みたいと思う
2	飲みたいと思わない
3	わからない

質問 2 あなたは、煙草を吸いたしたいと思いますか。（1 つ選択）	
1	吸いたと思う
2	吸いたと思わない
3	わからない

質問 3 あなたは、薬物乱用問題について危機感や不安を感じていますか。（1 つ選択）	
1	非常に感じている
2	ある程度感じている
3	どちらともいえない
4	あまり感じていない
5	ほとんど感じていない

質問 4 あなたは、以下の薬物の名前を知っていますか。（複数選択可）	
1	有機溶剤（シンナー、トルエンなど）
2	覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）
3	大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど）
4	コカイン（コーク、スノウ、クラックなど）
5	あへん類（ヘロインなど）
6	LSD（アシッド、フェニックス、ドラゴンなど）
7	MDMA（エクスタシーなど）
8	いわゆる危険ドラッグ（脱法ハーブ、ゾンビたばこなど）
9	大麻入り食品（大麻グミなど）
10	知っているものはない

【次の質問以降は質問 4 であげた薬物についてお聞きします。】	
質問 5 あなたは、これらの薬物についてどのような印象を持っていますか。（複数選択可）	
1	かっこいい
2	気持ち良くなれる気がする
3	ダイエットに効果がある
4	眠気覚ましに効果がある
5	1 回使うくらいであれば、心や体への害はない
6	心や体に害がある
7	犯罪に巻き込まれる
8	使ったり、持っていたりするのは悪いことだ
9	1 回でも使うと止められなくなる
10	人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ
11	特にない
12	わからない

質問6 あなたは、これらの薬物を使ったり、持っていたりした場合、また、他人に譲渡したり、譲渡された場合、どうなると思いますか。（1つ選択）	
1	罰せられる
2	罰せられるものもある
3	1回くらいなら、罰せられることはない
4	罰せられることはない
5	わからない

質問7 あなたは、これらの薬物について学んだり聞いたりしたことがありましたか。（どちらかを選択）	
1	あった
2	なかった

質問8 あなたは、薬物を使った場合、以下のようにになることがあるのを知っていましたか。（複数選択可）	
1	現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある
2	わけもなく怯えたり（妄想気分）、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある
3	自分の行動に干渉する声が聞こえる（幻聴）ことがある
4	何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる
5	依存性があり、意思の力ではなかなかやめることができない
6	知らなかった

質問9 あなたは、これらの薬物について何から情報を得ましたか。（複数選択可）	
1	小学校の授業
2	中学校の授業
3	高校の授業
4	大学が配布しているリーフレット等
5	大学での啓発ビデオ
6	大学での講演会
7	友達、仲間、先輩、後輩
8	家族
9	ポスター、パンフレット
10	本、雑誌
11	新聞
12	テレビ
13	ラジオ
14	インターネット
15	SNS
16	その他

質問10 あなたは、これらの薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）をもっと知りたいですか。（1つ選択）	
1	知りたい
2	知りたいとは思わない
3	どちらでもない

質問 11 あなたは、これらの薬物を使った場合の害について学ぶとしたらどこがよいと思いますか。（複数選択可）	
1	大学（講演会、ビデオ、リーフレット）
2	家庭
3	地域活動、自治体等の広報誌
4	図書館、公民館
5	保健所
6	警察
7	厚生労働省麻薬取締部
8	病院
9	インターネット
10	講演会、座談会
11	特にない
12	その他

質問 12 あなたは、これらの薬物を使う人が増えているのはどのような理由からだと思いますか。（複数選択可）	
1	薬物が簡単に手に入るようになっている
2	本や雑誌等に薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている
3	SNSやインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている
4	社会のルールを守ろうとする意識が薄れている
5	薬物を使ってもすべての人が警察に見つかるわけではない
6	簡単にやせられるとか、1回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い
7	薬物の害について学ぶことが少ない
8	友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる
9	学校や家庭がおもしろくない
10	わからない
11	その他

質問 13 あなたは、これらの薬物を使うことについてどのように考えていますか。（1つ選択）	
1	どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない
2	1回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない
3	他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である
4	その他

質問 14（ア）あなたは、これらの薬物が使用されているところを直接見たことがありますか。（テレビ、映画、インターネット、報道等で見たものは除きます）（どちらかを選択）	
1	ない
2	ある

【質問 14（ア）で「2 ある」を選択した人だけお答えください】	
質問 14（イ）どこで見ましたか。（複数選択可）	
1	繁華街、路上など
2	公園
3	駐車場
4	イベント会場、娯楽施設など
5	その他

質問 15 あなたは、これらの薬物を使用することや購入することを誘われたり、勧められたりすることが、これまでにありましたか。（1つ選択）	
1	誘われたり、勧められたことはない
2	購入を勧められたことがある
3	使用を誘われたことがある
4	無理やり使わされたことがある
5	わからない

質問 16 あなたは、これらの薬物を使用することを誰かに誘われたら、どのように行動しますか。（複数選択可）	
1	誘った相手が誰であろうと、断る
2	誘った相手によっては、断りきれないかもしれない
3	一回くらいであれば体に害がなさそうなので断らないかもしれない
4	好奇心や面白半分から断らないかもしれない
5	悩み事があったり、疲れていたりしたら断らないかもしれない
6	わからない
7	その他

質問 17（ア）あなたの身近な周囲に、これらの薬物を所持したり、使用している（いた）人がいますか。（1つ選択）	
1	いない
2	いる（いた）
3	わからない

【質問 17（ア）で「2 いる（いた）」を選択した人だけお答えください】	
質問 17（イ）どの薬物でしたか。（複数選択可）	
1	有機溶剤（シンナー、トルエンなど）
2	覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）
3	大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど）
4	コカイン（コーク、スノウ、クラックなど）
5	あへん類（ヘロインなど）
6	LSD（アシッド、フェニックス、ドラゴンなど）
7	MDMA（エクスタシーなど）
8	いわゆる危険ドラッグ（脱法ハーブ、ゾンビたばこなど）
9	大麻入り食品（大麻グミなど）
10	わからない

質問 18 あなたは、もし友人がこれらの薬物を使用していることを知った場合、どうしますか。（複数選択可）	
1	使用をやめるよう説得する
2	他の人（先生や友人など）に伝える
3	警察に通報する
4	医療機関や保健所等に連絡する
5	個人の自由であるので放っておく
6	わからない
7	その他

質問 19 あなたは、これらの薬物に関する相談窓口があることを知っていますか。（複数選択可）	
1	警察の相談窓口
2	行政機関の相談窓口（精神保健福祉センター等）
3	厚生労働省麻薬取締部の相談窓口
4	医療機関の相談窓口
5	民間の支援団体の相談窓口
6	知らない
7	その他

質問 20 あなたや、あなたのまわりの人がこれらの薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報は何か。（複数選択可）	
1	薬物乱用による健康被害情報
2	薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報
3	国や地方公共団体の薬物乱用対策情報
4	医療機関や民間支援団体の取り組み情報
5	特になし
6	その他

質問 21（ア）あなたは、これらの薬物を入手することが可能ですか。（1 つ選択）	
1	不可能だ
2	かなり難しい
3	難しいが手に入る
4	手に入る

【質問 21（ア）で「3 難しいが手に入る、または、4 手に入る」を選択した人だけお答えください】	
質問 21（イ）入手可能と考えた理由は何ですか。（複数選択可）	
1	SNSやインターネットで探せば見つけることができるから
2	SNSやインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから
3	友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから
4	繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから
5	それ以外

【質問 21（イ）で「5 それ以外」を選択した人だけお答えください】

質問 21（ウ）それ以外に入手可能と考えた理由は何ですか。

質問 22 あなたは、医薬品医療機器等法により、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッド、ゾンビタバコなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となる薬物になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

- | | |
|---|--------|
| 1 | 知っている |
| 2 | 知らなかった |

質問 23 あなたは、「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」が社会問題になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」とは、市販薬（かぜ薬、解熱剤・鎮痛剤・睡眠薬など）を定められた用法・用量以上に服用する（過剰摂取する）ことで、薬物への依存が高まるだけでなく、内臓機能障害や最悪の場合は心肺停止で死亡するケースもある、薬物乱用の一種です。

- | | |
|---|--------|
| 1 | 知っている |
| 2 | 知らなかった |

質問 24 2023 年 12 月に「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」が成立し、2024 年 12 月 12 日にその一部が施行されていますが、あなたはこの施行内容について知っていますか。（複数選択可）

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1 | 医療目的以外で大麻を使用・摂取することが違法となった |
| 2 | 大麻の所持・譲受・譲渡・輸出入・製造に対する刑罰が厳罰化された |
| 3 | 知らなかった |

3. 調査の結果

(1) 回答者数

本調査には、会員大学のうち 33 大学の学生、計 16,586 名から回答があった。大学別の回答者は下表のとおりである。

図表 1 会員大学全体の回答者数と所属大学別回答者数

	回答者数	割合 (%)			
会員大学全体	16,586	100.00			
回答者所属大学	回答者数	割合 (%)	回答者所属大学	回答者数	割合 (%)
大阪大学	102	0.61	大阪体育大学	12	0.07
大阪教育大学	0	0.00	大阪電気通信大学	111	0.67
大阪公立大学	136	0.82	大阪人間科学大学	0	0.00
藍野大学	46	0.28	大阪保健医療大学	119	0.72
追手門学院大学	629	3.79	大手前大学	81	0.49
大阪青山大学	30	0.18	関西大学	6,953	41.92
大阪医科薬科大学	417	2.51	関西福祉科学大学	0	0.00
大阪大谷大学	51	0.31	近畿大学	1,415	8.53
大阪学院大学	191	1.15	四條畷学園大学	0	0.00
大阪観光大学	50	0.30	四天王寺大学	1,065	6.42
大阪経済大学	468	2.82	摂南大学	2,160	13.02
大阪経済法科大学	0	0.00	千里金蘭大学	17	0.10
大阪工業大学	256	1.54	相愛大学	165	0.99
大阪国際大学	286	1.72	宝塚大学	105	0.63
大阪産業大学	504	3.04	帝塚山学院大学	178	1.07
大阪樟蔭女子大学	357	2.15	梅花女子大学	0	0.00
大阪商業大学	23	0.14	羽衣国際大学	122	0.74
大阪女学院大学	146	0.88	阪南大学	151	0.91
大阪信愛学院大学	119	0.72	東大阪大学	0	0.00
大阪成蹊大学	3	0.02	桃山学院大学	115	0.69
大阪総合保育大学	0	0.00	森ノ宮医療大学	0	0.00
			無回答	3	0.02

※性別回答数内訳：男性 5,037 名、女性 4,265 名、その他 36 名、回答しない 295 名
計 9,633 名（関西大学調査分は除く）

※各選択肢の割合（％）は、小数点第 2 位以下を四捨五入しているため、合計が 100％にならない場合がある（以下の図表も同様）。

(2) 飲酒の志向

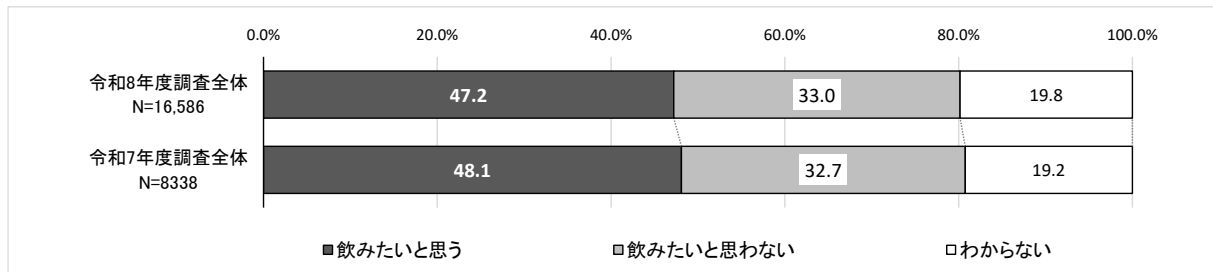
質問1 あなたは、お酒を飲みたいと思いますか。(1つ選択)

飲酒の志向については、「飲みたいと思う」が47.2%、「飲みたいと思わない」が33.0%、「わからない」が19.8%となっている。

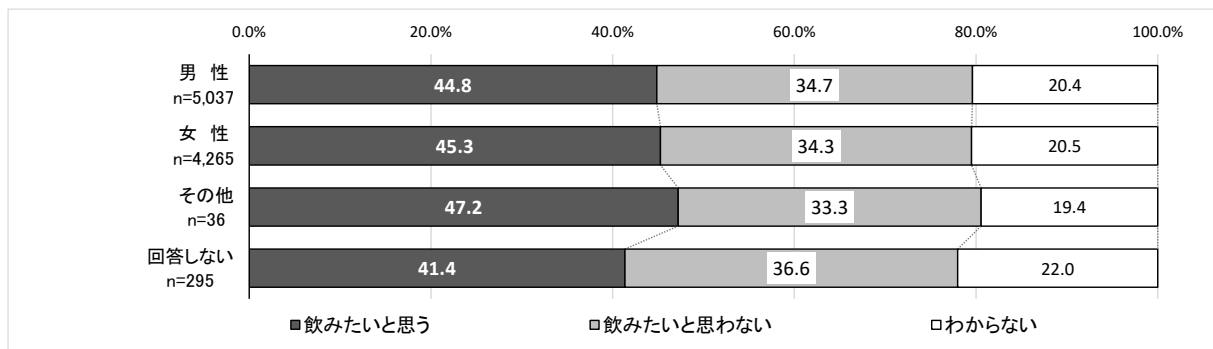
昨年度調査と同様の結果となっている。

性別にみると、「飲みたいと思う」の回答割合は、「回答しない」とした人が他に比べてやや低い。

図表2 飲酒の志向
《昨年度調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査コンソ調査	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	8,338	100.0
飲みたいと思う	7,831	47.2	2,259	44.8	1,930	45.3	17	47.2	122	41.4	4,011	48.1
飲みたいと思わない	5,467	33.0	1,750	34.7	1,461	34.3	12	33.3	108	36.6	2,724	32.7
わからない	3,288	19.8	1,028	20.4	874	20.5	7	19.4	65	22.0	1,603	19.2

※令和7年度調査は関西大学分を除いて集計。

(3) 喫煙の志向

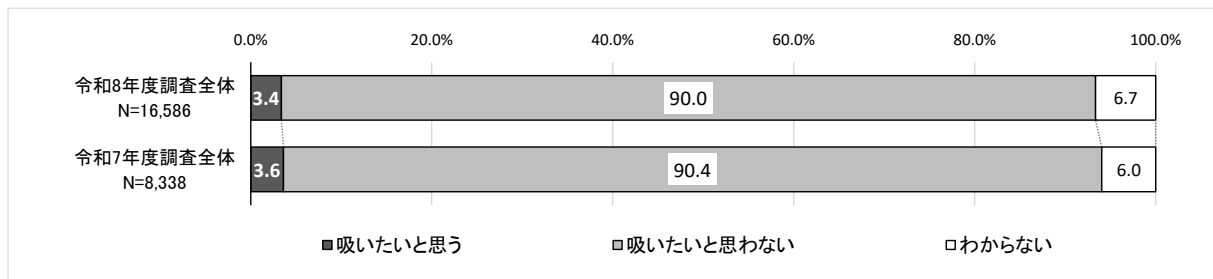
質問2 あなたは、煙草を吸いたと思いますか。(1つ選択)

喫煙の志向については、90.0%が「吸いたと思わない」と回答しており、「吸いたと思う」が3.4%、「わからない」が6.7%となっている。

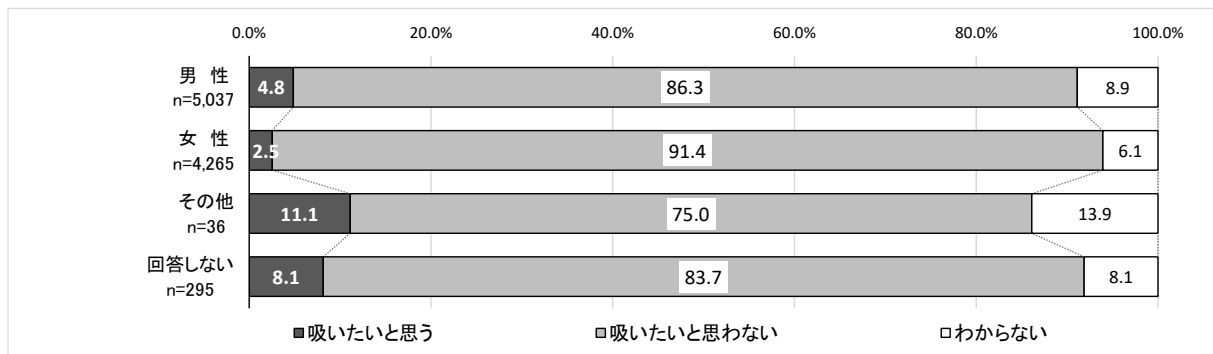
昨年度調査と同様の結果となっている。

性別にみると、「吸いたと思わない」の回答割合は、「女性」が他に比べてやや高く、「男性」および「回答しない」とした人の割合は、それぞれ8割台となっている。

図表3 喫煙の志向
《昨年度調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査コンソ調査	
	n	%	男性 n	%	女性 n	%	その他 n	%	回答しない n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	8,338	100.0
吸いたと思う	562	3.4	244	4.8	108	2.5	4	11.1	24	8.1	301	3.6
吸いたと思わない	14,920	90.0	4,346	86.3	3,898	91.4	27	75.0	247	83.7	7,540	90.4
わからない	1,104	6.7	447	8.9	259	6.1	5	13.9	24	8.1	497	6.0

※令和7年度調査は関西大学分を除いて集計。

(4) 薬物乱用問題への危機感・不安感

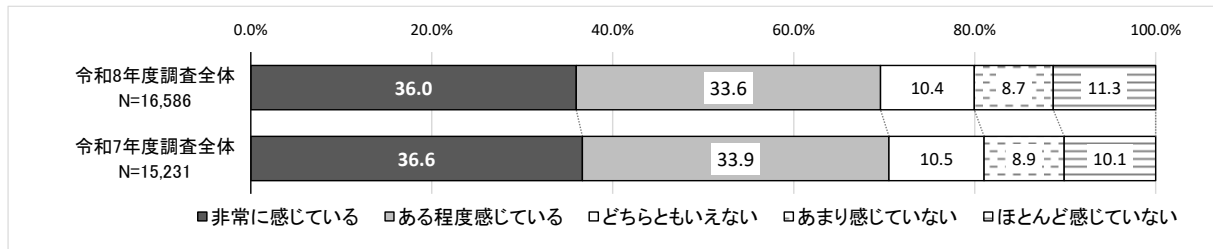
質問3 あなたは、薬物乱用問題について危機感や不安を感じていますか。(1つ選択)

薬物乱用問題への危機感・不安感については、「非常に感じている」が36.0%、「ある程度感じている」が33.6%で、約7割の人が危機感・不安感を感じている。「どちらともいえない」が10.4%、「あまり感じていない」が8.7%、「ほとんど感じていない」が11.3%である。

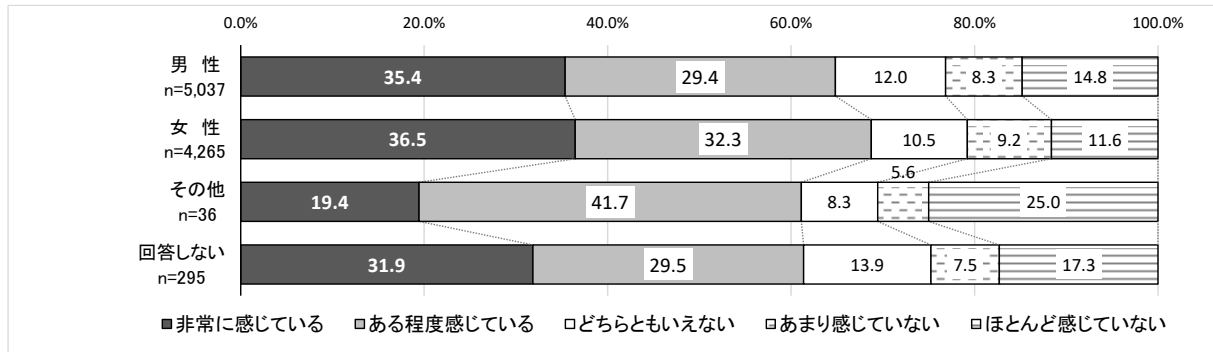
昨年度調査と同様の結果となっている。

性別にみると、危機感・不安感がある割合(「非常に感じている」と「ある程度感じている」の合計)は、「女性」が他に比べてやや高い。

図表4 薬物乱用問題に対する危機感・不安感
《昨年度調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0
非常に感じている	5,966	36.0	1,782	35.4	1,555	36.5	7	19.4	94	31.9	5,582	36.6
ある程度感じている	5,576	33.6	1,483	29.4	1,377	32.3	15	41.7	87	29.5	5,159	33.9
どちらともいえない	1,718	10.4	606	12.0	446	10.5	3	8.3	41	13.9	1,599	10.5
あまり感じていない	1,447	8.7	420	8.3	392	9.2	2	5.6	22	7.5	1,349	8.9
ほとんど感じていない	1,879	11.3	746	14.8	495	11.6	9	25.0	51	17.3	1,542	10.1

(5) 薬物名の認知状況

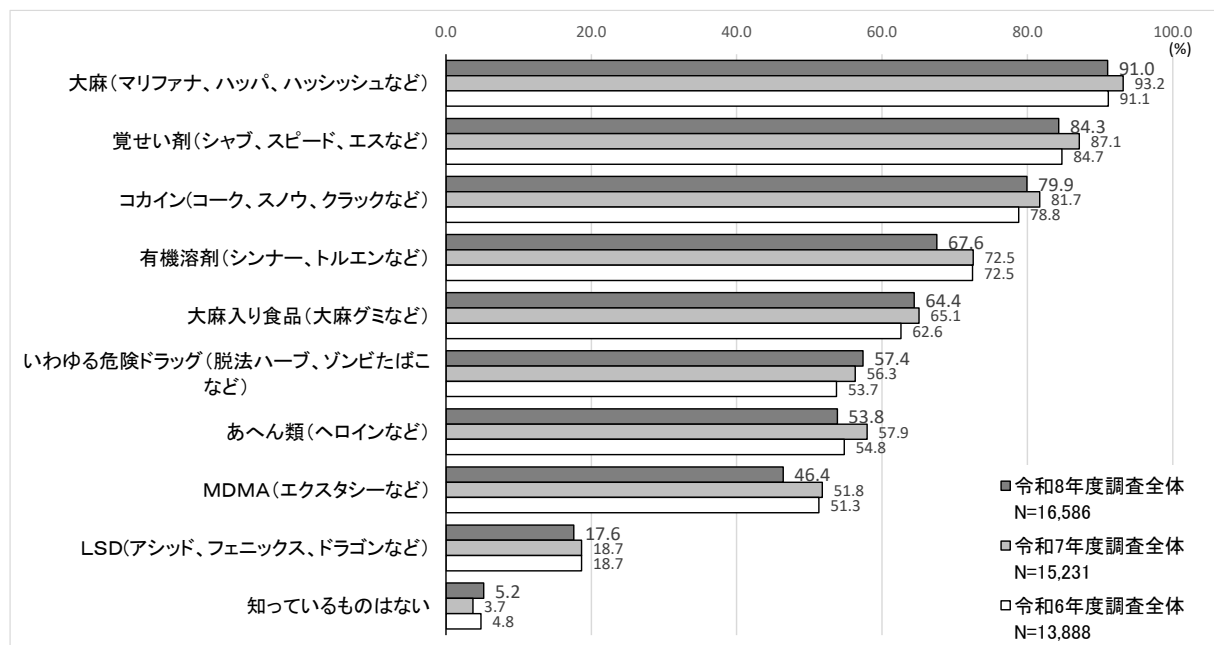
質問4 あなたは、以下の薬物の名前を知っていますか。(複数選択可)

9種類の薬物を提示して、知っている名前をたずねたところ、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)」の回答割合が91.0%と最も高く、「覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)」が84.3%、「コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)」が79.9%、「有機溶剤(シンナー、トルエンなど)」が67.6%、「大麻入り食品(大麻グミなど)」が64.4%、「いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブ、ゾンビたばこなど)」が57.4%、「あへん類(ヘロインなど)」が53.8%、「MDMA(エクスタシーなど)」が46.4%となっている。「MDMA(エクスタシーなど)」と「LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴンなど)」以外の7種の薬物については、認知度が5割以上と高い。なお、「知っているものはない」と回答した割合は5.2%である。

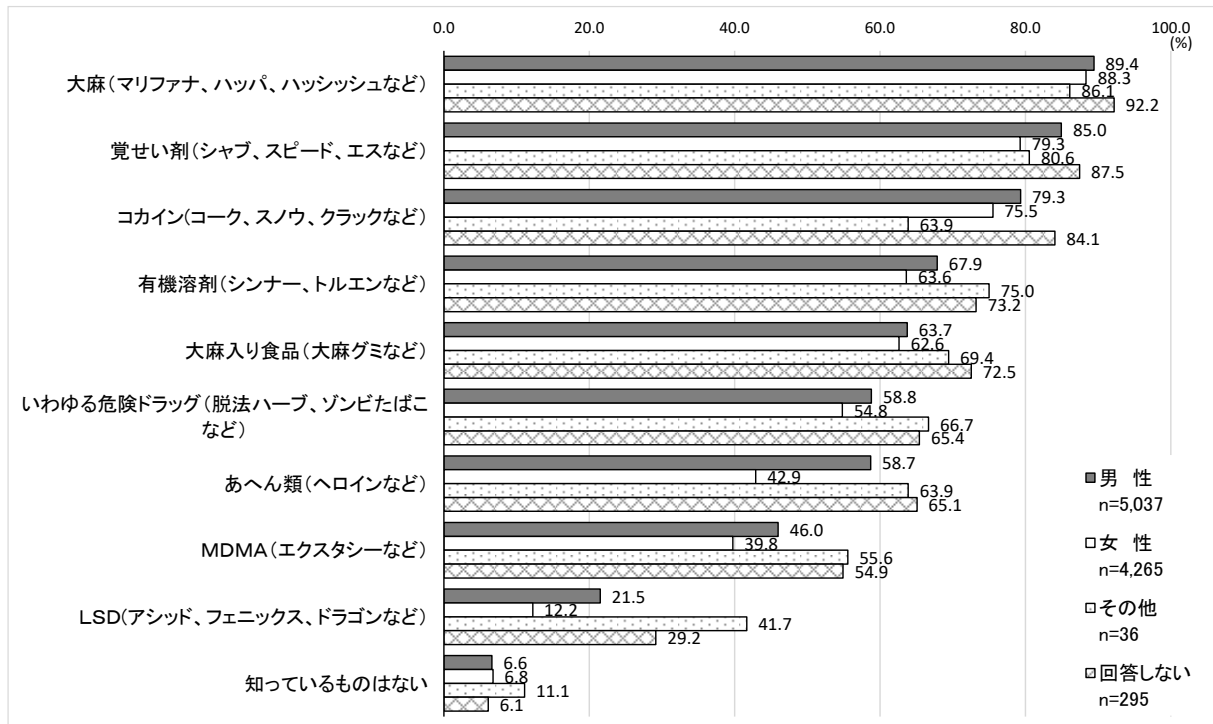
過去2年の調査と比較すると、「いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブ、ゾンビたばこなど)」以外の薬物の認知度がやや下がっており、「MDMA(エクスタシーなど)」の認知度が5.4ポイント下がっている。

性別にみると、認知している薬物の傾向に差はないが、すべての薬物について「女性」の認知度が他に比べて低い。

図表5 知っている薬物の名前
《3か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体		令和6年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
有機溶剤（シンナー、トルエンなど）	11,204	67.6	3,418	67.9	2,714	63.6	27	75.0	216	73.2	11,048	72.5	10,062	72.5
覚せい剤（シャブ、スピード、エスなど）	13,982	84.3	4,279	85.0	3,381	79.3	29	80.6	258	87.5	13,273	87.1	11,768	84.7
大麻（マリファナ、ハッパ、ハッシュシュなど）	15,099	91.0	4,505	89.4	3,768	88.3	31	86.1	272	92.2	14,190	93.2	12,657	91.1
コカイン（コーク、スノウ、クラックなど）	13,257	79.9	3,996	79.3	3,222	75.5	23	63.9	248	84.1	12,442	81.7	10,942	78.8
あへん類（ヘロインなど）	8,931	53.8	2,957	58.7	1,830	42.9	23	63.9	192	65.1	8,825	57.9	7,610	54.8
LSD（アシッド、フェニックス、ドラゴンなど）	2,917	17.6	1,084	21.5	521	12.2	15	41.7	86	29.2	2,845	18.7	2,592	18.7
MDMA（エクスタシーなど）	7,699	46.4	2,316	46.0	1,696	39.8	20	55.6	162	54.9	7,886	51.8	7,128	51.3
いわゆる危険ドラッグ（脱法ハーブ、ゾンビたばこなど）	9,518	57.4	2,963	58.8	2,338	54.8	24	66.7	193	65.4	8,577	56.3	7,462	53.7
大麻入り食品（大麻グミなど）	10,684	64.4	3,211	63.7	2,671	62.6	25	69.4	214	72.5	9,915	65.1	8,693	62.6
知っているものはない	865	5.2	333	6.6	288	6.8	4	11.1	18	6.1	565	3.7	672	4.8
累計	94,156		29,062		22,429		221		1,859		89,566		79,586	

(6) 薬物の印象

質問5 あなたは、これらの（質問4であげた）薬物についてどのような印象を持っていますか。（複数選択可）

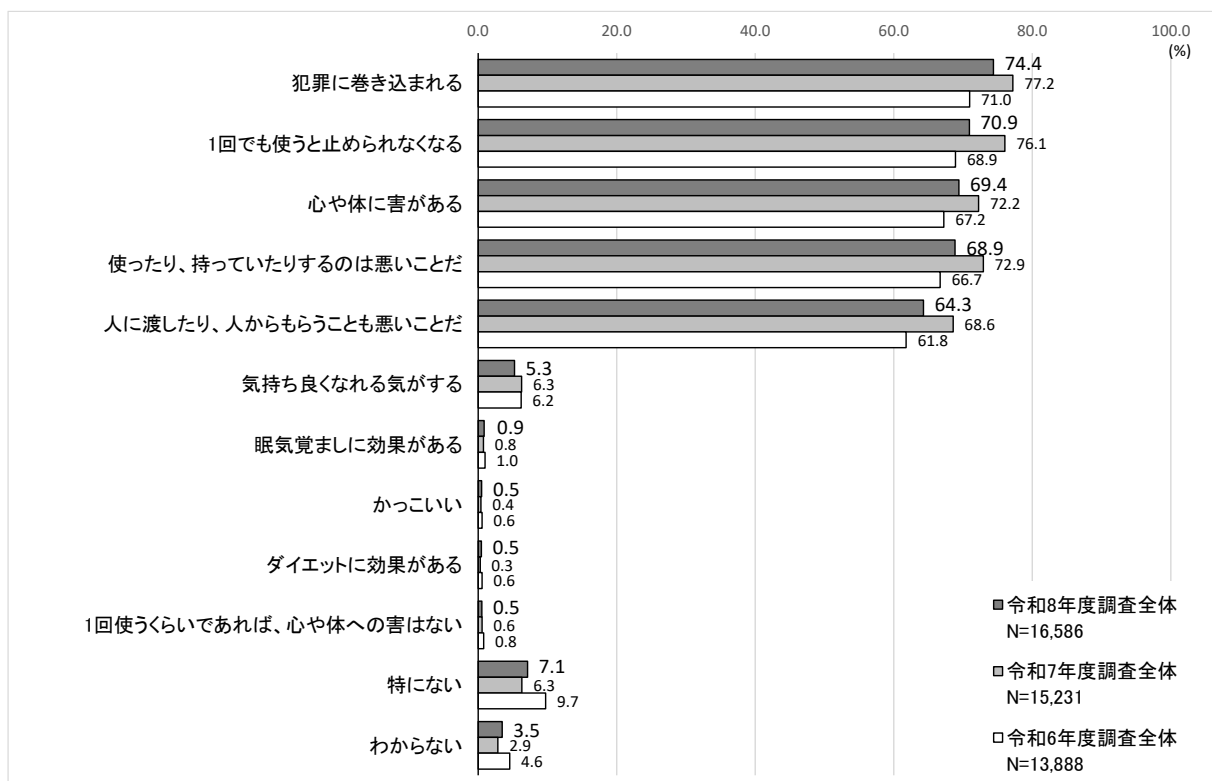
質問4で提示した薬物の印象について、74.4%が「犯罪に巻き込まれる」との印象をもっており、「1回でも使うと止められなくなる」が70.9%、「心や体に害がある」が69.4%、「使ったり、持ったりするのは悪いことだ」が68.9%、「人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ」が64.3%と、マイナスの印象が7割前後となっている。

昨年度調査と比較すると、マイナスの印象に関する項目の割合が低くなっている。

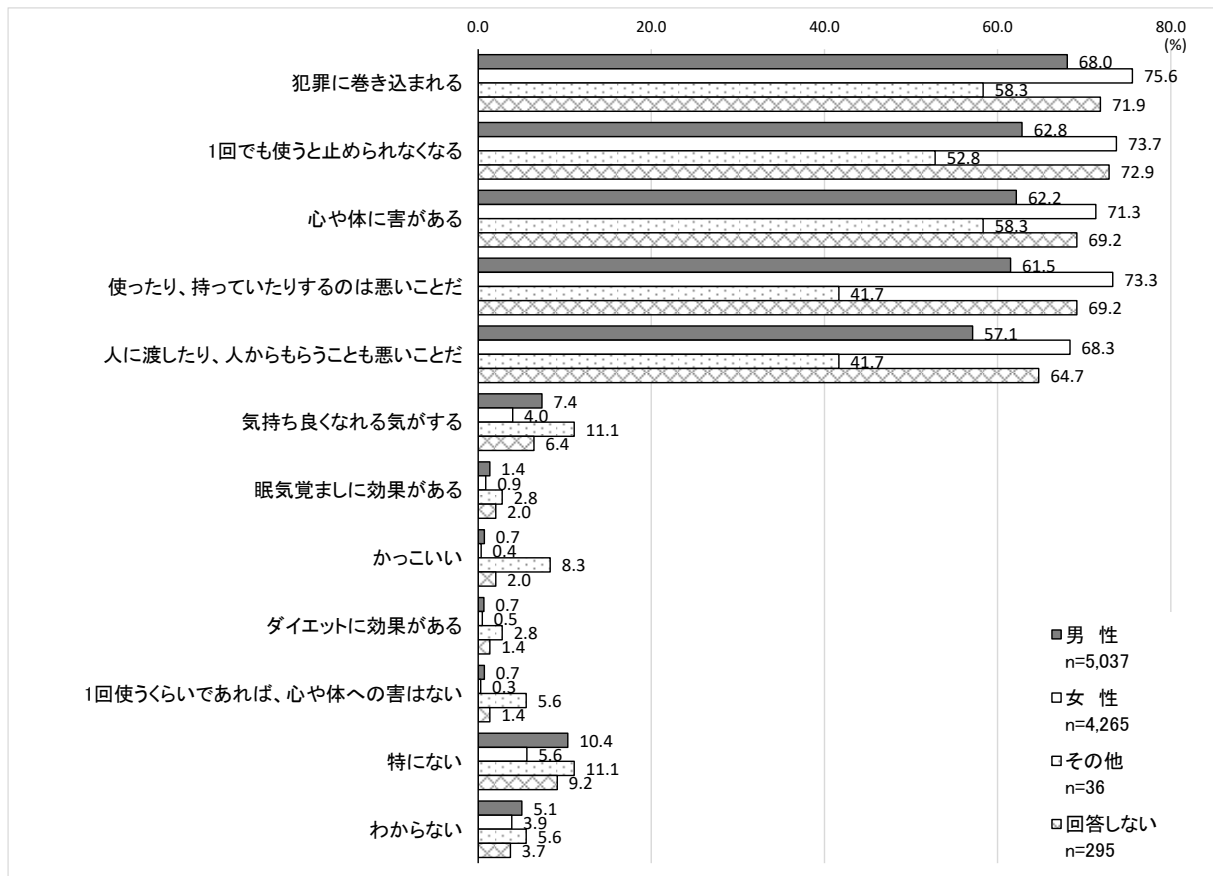
「気持ち良くなれる気がする」、「眠気覚ましに効果がある」、「1回使うくらいであれば、心や体への害はない」、「カッコいい」、「ダイエットに効果がある」といったプラスの印象を選択した割合は低いものの、過去2年の調査と同様に一定数が選択している。

性別にみると、「女性」は、マイナスの印象を示す各項目の回答割合が他に比べて高い。

図表6 薬物の印象
《3か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査		令和6年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
かっこいい	85	0.5	37	0.7	15	0.4	3	8.3	6	2.0	64	0.4	81	0.6
気持ち良くなれる気がする	871	5.3	371	7.4	171	4.0	4	11.1	19	6.4	958	6.3	862	6.2
ダイエットに効果がある	78	0.5	34	0.7	21	0.5	1	2.8	4	1.4	45	0.3	80	0.6
眠気覚ましに効果がある	143	0.9	68	1.4	38	0.9	1	2.8	6	2.0	119	0.8	138	1.0
1回使うくらいであれば、心や体への害はない	90	0.5	36	0.7	13	0.3	2	5.6	4	1.4	86	0.6	114	0.8
心や体に害がある	11,513	69.4	3,131	62.2	3,043	71.3	21	58.3	204	69.2	11,002	72.2	9,339	67.2
犯罪に巻き込まれる	12,338	74.4	3,427	68.0	3,223	75.6	21	58.3	212	71.9	11,758	77.2	9,857	71.0
使ったり、持っていたりするのはいきことだ	11,422	68.9	3,097	61.5	3,126	73.3	15	41.7	204	69.2	11,109	72.9	9,266	66.7
1回でも使うと止められなくなる	11,762	70.9	3,164	62.8	3,144	73.7	19	52.8	215	72.9	11,584	76.1	9,573	68.9
人に渡したり、人からもらうことも悪いことだ	10,663	64.3	2,877	57.1	2,915	68.3	15	41.7	191	64.7	10,444	68.6	8,583	61.8
特にない	1,184	7.1	522	10.4	240	5.6	4	11.1	27	9.2	963	6.3	1,354	9.7
わからない	575	3.5	255	5.1	166	3.9	2	5.6	11	3.7	437	2.9	633	4.6
累計	60,724		17,019		16,115		108		1,103		58,569		49,880	

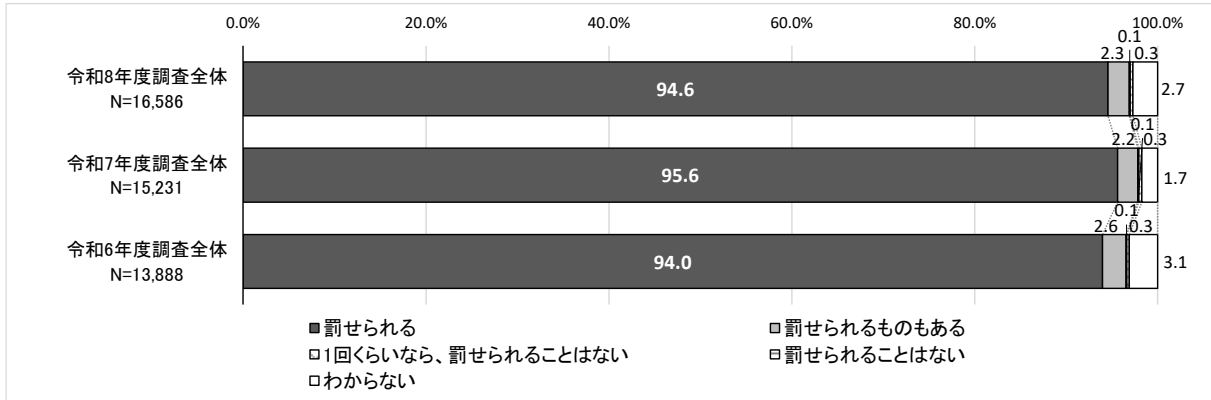
(7) 薬物の使用・所持・譲渡への処罰に関する認識

質問6 あなたは、これらの薬物を使ったり、持っていたりした場合、また他人に譲渡したり、譲渡された場合、どうなと思いますか。(1つ選択)

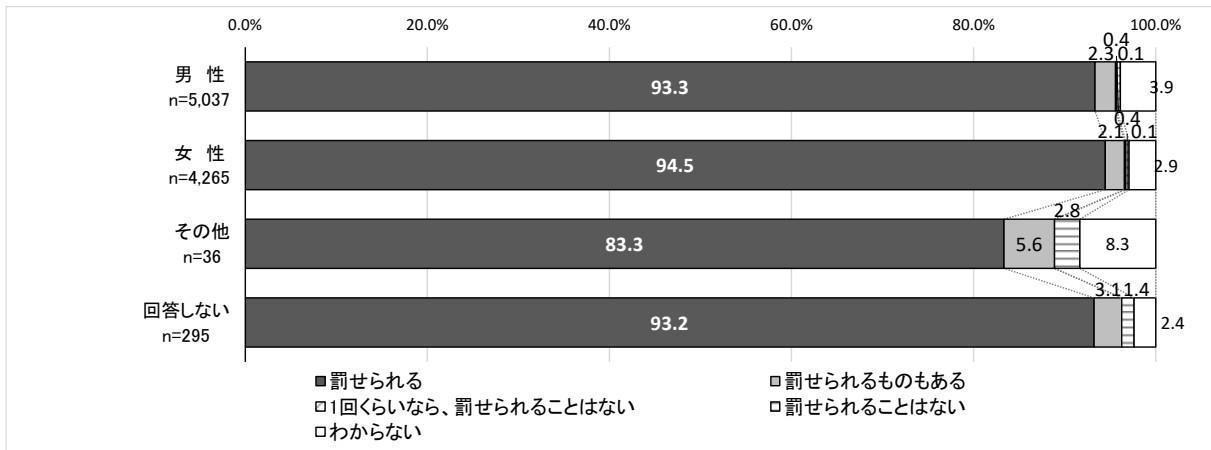
質問4で提示した薬物を使用したり、所持していたり、他人に譲渡したり、譲渡された場合どうなと思うかについては、94.6%が「罰せられる」と回答し、「罰せられるものもある」が2.3%、「わからない」は2.7%であった。「罰せられることはない(「1回くらいなら」を含む)」と回答した人もわずかに存在している。

この傾向は過去2年間の調査結果と同様であり、性別による大きな差はみられない。

図表7 薬物使用等への処罰に関する認識
《3か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査全体		令和6年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
罰せられる	15,688	94.6	4,701	93.3	4,029	94.5	30	83.3	275	93.2	14,565	95.6	13,052	94.0
罰せられるものもある	382	2.3	114	2.3	90	2.1	2	5.6	9	3.1	333	2.2	357	2.6
1回くらいなら、罰せられることはない	17	0.1	7	0.1	5	0.1	0	0.0	0	0.0	20	0.1	12	0.1
罰せられることはない	52	0.3	19	0.4	16	0.4	1	2.8	4	1.4	50	0.3	38	0.3
わからない	447	2.7	196	3.9	125	2.9	3	8.3	7	2.4	263	1.7	429	3.1

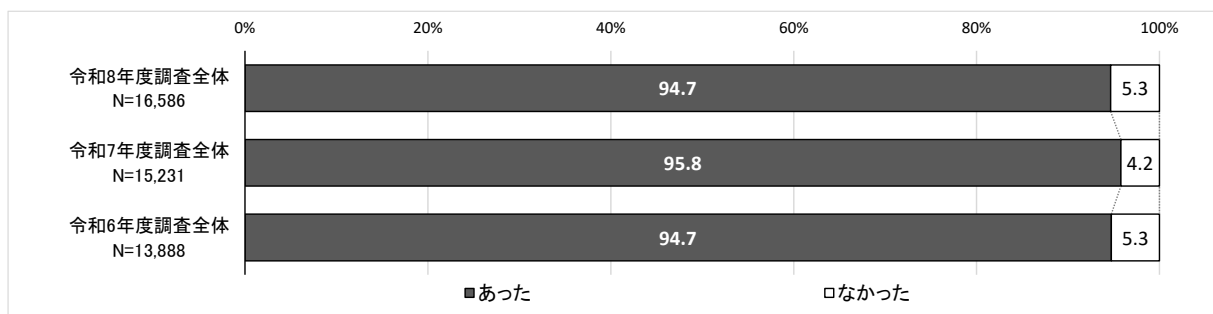
(8) 薬物についての学習経験の有無

質問7 あなたは、これらの薬物について学んだり聞いたりしたことがありましたか。
(どちらかを選択)

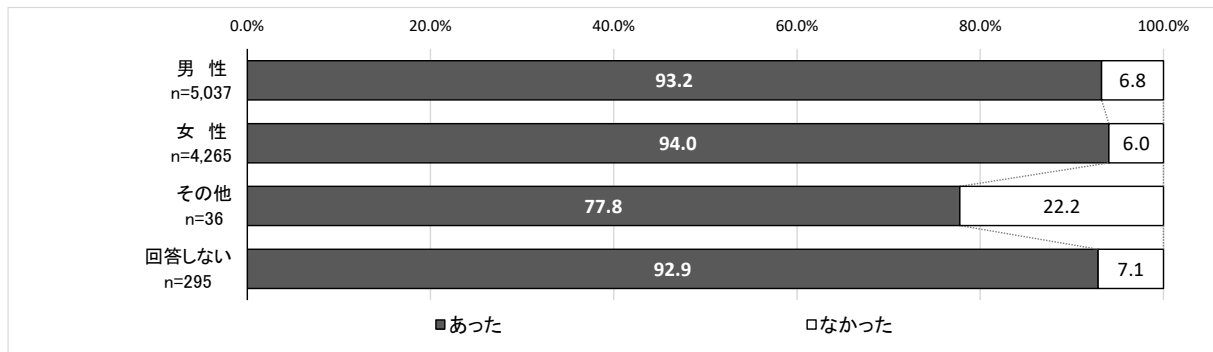
質問4で提示した薬物について、これまでに学んだり聞いたりしたことがあるかを尋ねたところ、94.7%が「あった」と回答している。

この傾向は過去2年間の調査結果と同様であり、性別による大きな差はみられない。

図表8 薬物についての学習経験の有無
《3か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査全体		令和6年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
あった	15,702	94.7	4,697	93.2	4,011	94.0	28	77.8	274	92.9	14,587	95.8	13,155	94.7
なかった	884	5.3	340	6.8	254	6.0	8	22.2	21	7.1	644	4.2	733	5.3

(9) 薬物使用時の症状に関する認知状況

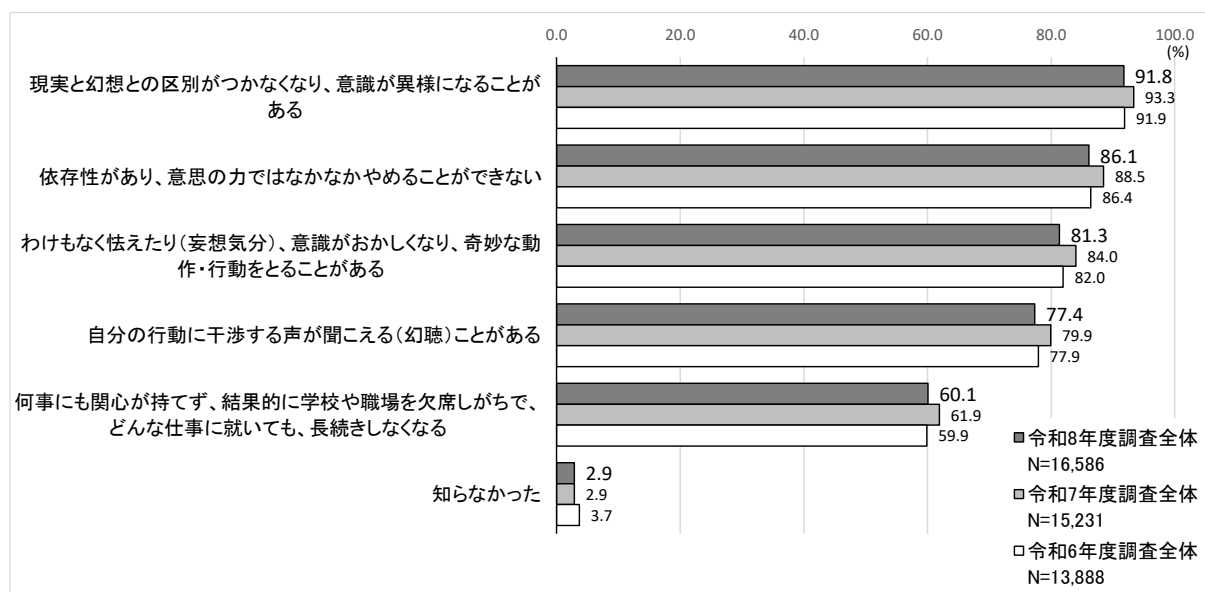
質問 8 あなたは、薬物を使った場合、以下になることがあるのを知っていましたか。(複数選択可)

質問 4 で提示した薬物について、使用時に現れる 5 つの症状を知っているかを尋ねたところ、ほとんどの回答者が提示したいずれかの症状を選択し、「知らなかった」と回答した割合は 2.9%であった。知っている症状としては、「現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある」が 91.8%、「依存性があり、意思の力ではなかなかやめることができない」が 86.1%、「わけもなく怯えたり（妄想気分）、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある」が 81.3%、「自分の行動に干渉する声が聞こえる（幻聴）ことがある」が 77.4%、「何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる」が 60.1%となっている。

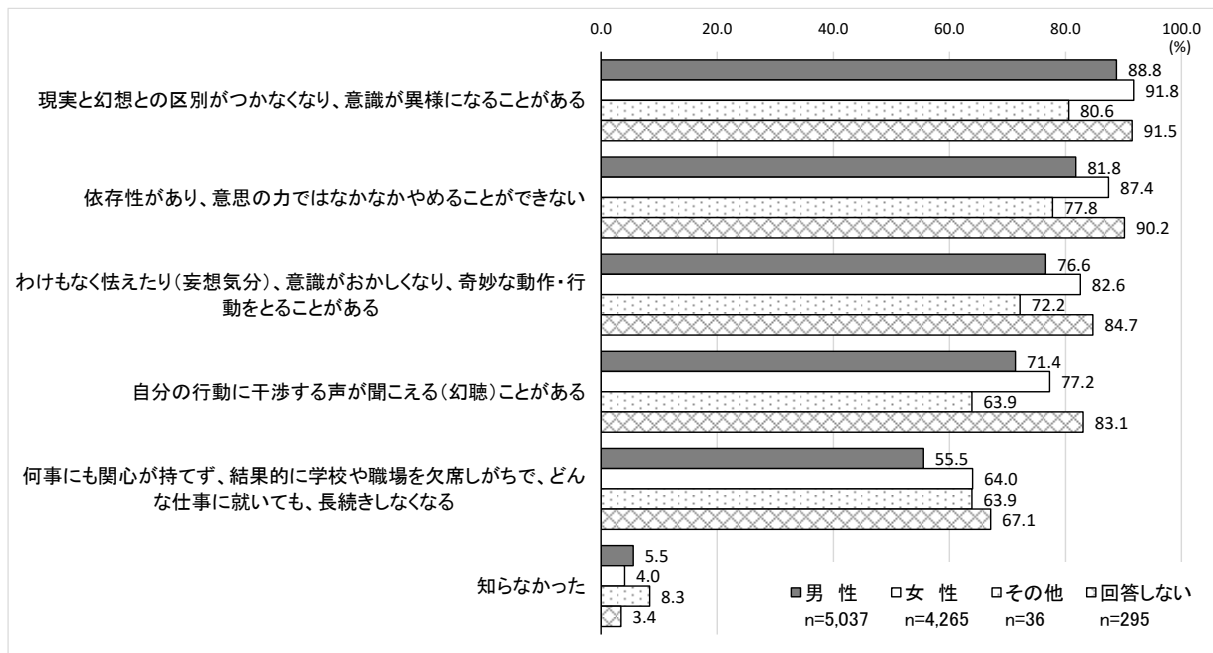
過去 2 年の調査と比較すると、傾向は概ね同様であるが、5 項目それぞれの認知割合は昨年度よりやや低い。

性別にみると、「男性」は他と比べて、使用時の症状 5 項目を認知している回答割合がやや低い。

図表 9 薬物使用時の症状に関する認知状況
 ≪3 か年調査比較≫



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体		令和6年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
現実と幻想との区別がつかなくなり、意識が異様になることがある	15,219	91.8	4,473	88.8	3,915	91.8	29	80.6	270	91.5	14,218	93.3	12,760	91.9
わけもなく怯えたり(妄想気分)、意識がおかしくなり、奇妙な動作・行動をとることがある	13,490	81.3	3,856	76.6	3,521	82.6	26	72.2	250	84.7	12,796	84.0	11,382	82.0
自分の行動に干渉する声が聞こえる(幻聴) ことがある	12,832	77.4	3,598	71.4	3,294	77.2	23	63.9	245	83.1	12,173	79.9	10,823	77.9
何事にも関心が持てず、結果的に学校や職場を欠席しがちで、どんな仕事に就いても、長続きしなくなる	9,968	60.1	2,795	55.5	2,730	64.0	23	63.9	198	67.1	9,432	61.9	8,321	59.9
依存性があり、意思の力ではなかなかやめることができない	14,286	86.1	4,119	81.8	3,729	87.4	28	77.8	266	90.2	13,478	88.5	12,002	86.4
知らなかった	479	2.9	277	5.5	171	4.0	3	8.3	10	3.4	436	2.9	513	3.7
累計	66,274		19,118		17,360		132		1,239		62,533		55,801	

(10) 薬物についての情報源

質問9 あなたは、これらの薬物について何から情報を得ましたか。(複数選択可)

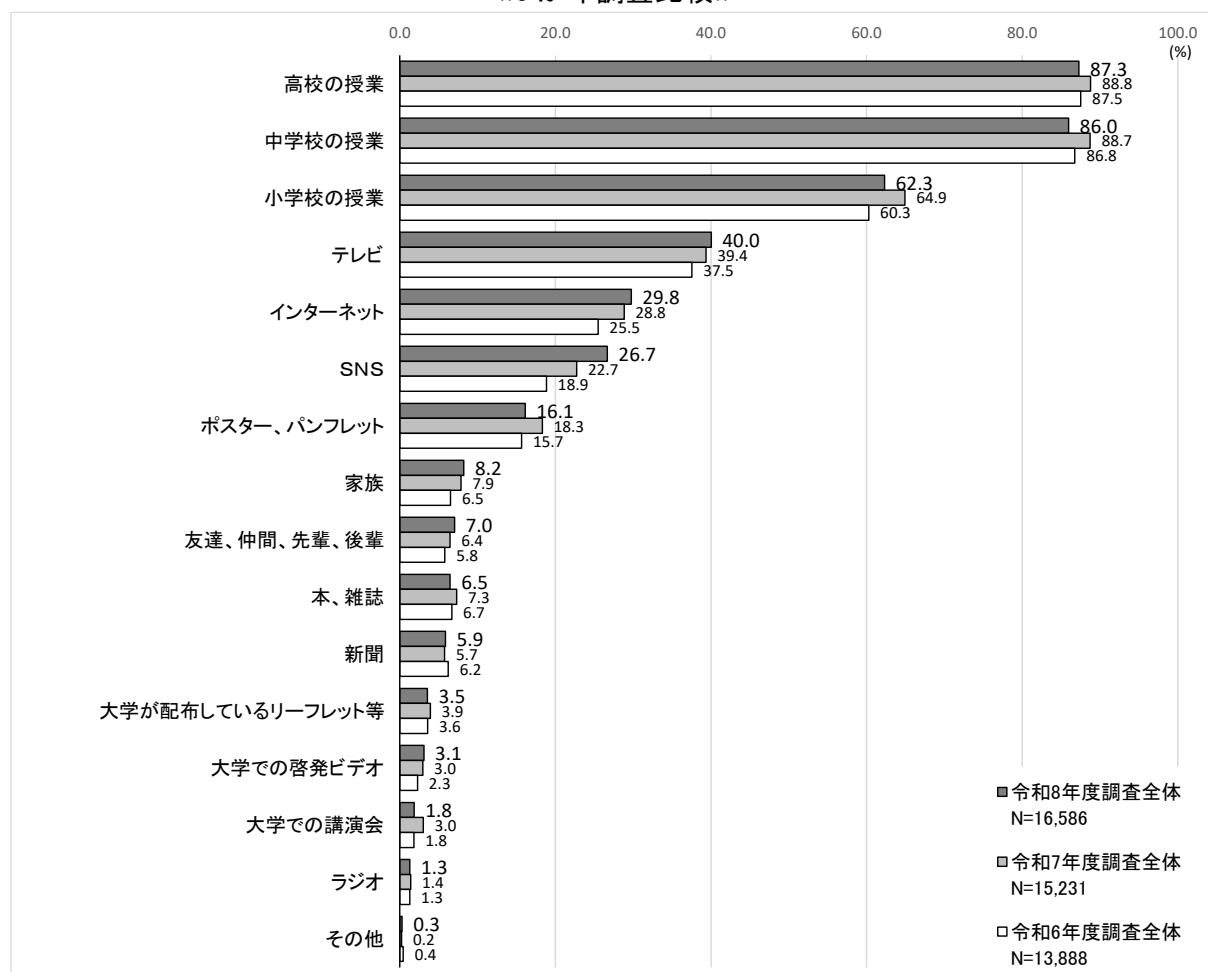
質問4で提示した薬物についての情報源は、87.3%が「高校の授業」、86.0%が「中学校の授業」と、9割近くが中学校・高校で情報を得ている。「小学校の授業」も62.3%と高く、大学進学前に、学校の授業を通じて薬物に関する何らかの情報を得ていることがわかる。

昨年度調査と比較すると、小・中・高校の授業で情報を得たとする回答割合が低くなっており、「ポスター・パンフレット」の回答割合もやや低い。一方で、「SNS」の回答割合は高くなっている。それ以外の選択肢については概ね同程度の回答割合となっている。

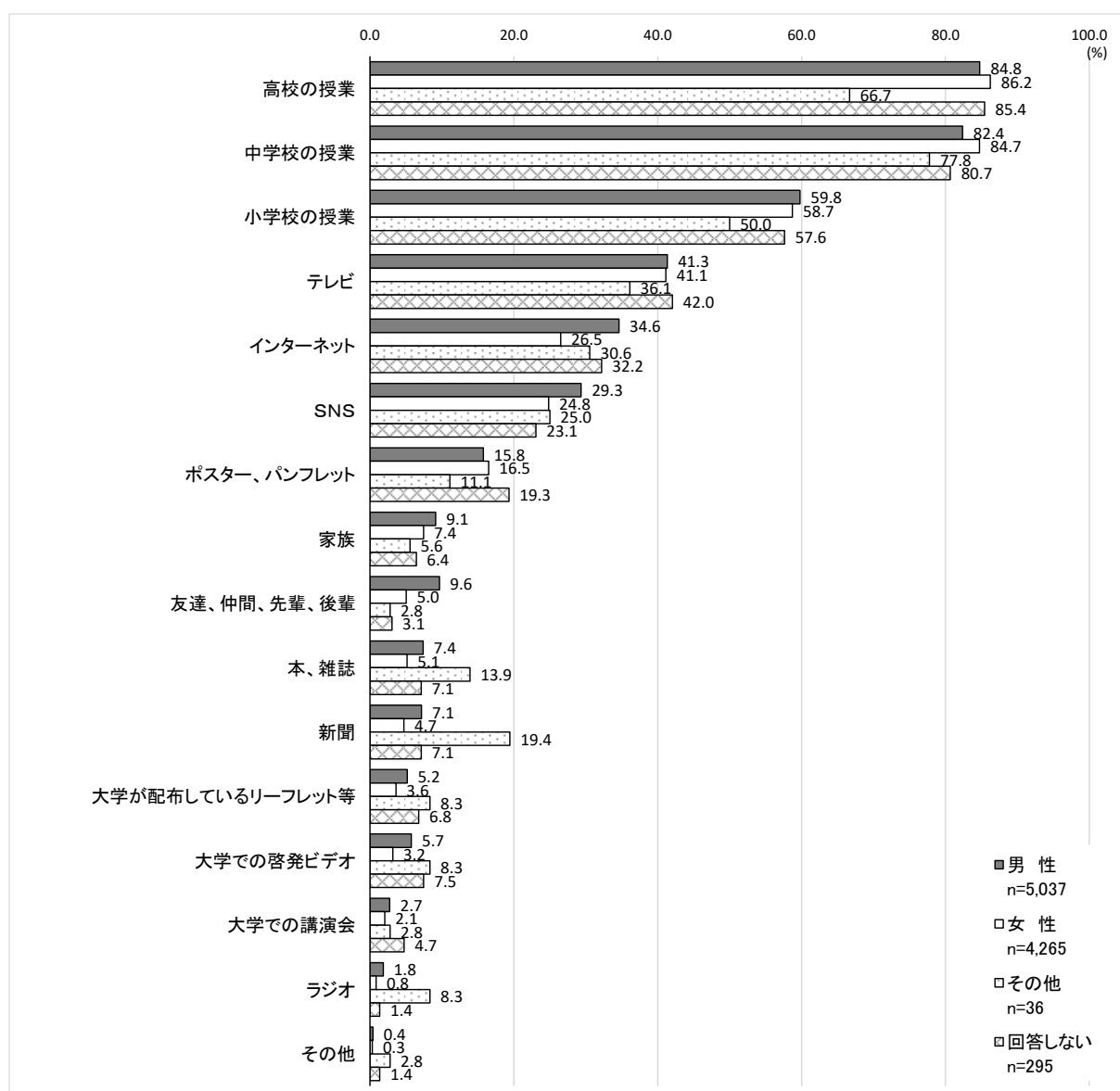
性別にみると、「男性」は他に比べて「インターネット」、「SNS」を情報源としている回答割合がやや高い。特に「女性」は「インターネット」を情報源としている回答割合が低い。

「その他」として記載された内容をみると、「ドラマ・映画」、「漫画・アニメ」や「YouTube」、「ゲーム」のほか、「裁判傍聴・裁判所」、「警察」、「学校の先生」など、対面で知った情報源も挙げられている。

図表10 薬物についての情報源
《3か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体		令和6年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
小学校の授業	10,335	62.3	3,011	59.8	2,504	58.7	18	50.0	170	57.6	9,890	64.9	8,371	60.3
中学校の授業	14,259	86.0	4,149	82.4	3,614	84.7	28	77.8	238	80.7	13,514	88.7	12,050	86.8
高校の授業	14,477	87.3	4,270	84.8	3,678	86.2	24	66.7	252	85.4	13,523	88.8	12,155	87.5
大学が配布しているリーフレット等	587	3.5	260	5.2	154	3.6	3	8.3	20	6.8	596	3.9	498	3.6
大学での啓発ビデオ	512	3.1	289	5.7	135	3.2	3	8.3	22	7.5	451	3.0	315	2.3
大学での講演会	304	1.8	138	2.7	88	2.1	1	2.8	14	4.7	460	3.0	253	1.8
友達、仲間、先輩、後輩	1,165	7.0	486	9.6	215	5.0	1	2.8	9	3.1	981	6.4	804	5.8
家族	1,364	8.2	460	9.1	317	7.4	2	5.6	19	6.4	1,197	7.9	906	6.5
ポスター、パンフレット	2,672	16.1	794	15.8	703	16.5	4	11.1	57	19.3	2,790	18.3	2,175	15.7
本、雑誌	1,070	6.5	372	7.4	219	5.1	5	13.9	21	7.1	1,111	7.3	927	6.7
新聞	971	5.9	360	7.1	201	4.7	7	19.4	21	7.1	875	5.7	865	6.2
テレビ	6,641	40.0	2,082	41.3	1,754	41.1	13	36.1	124	42.0	5,995	39.4	5,213	37.5
ラジオ	211	1.3	93	1.8	36	0.8	3	8.3	4	1.4	211	1.4	179	1.3
インターネット	4,935	29.8	1,743	34.6	1,130	26.5	11	30.6	95	32.2	4,391	28.8	3,540	25.5
S N S	4,425	26.7	1,478	29.3	1,059	24.8	9	25.0	68	23.1	3,464	22.7	2,618	18.9
その他	48	0.3	20	0.4	13	0.3	1	2.8	4	1.4	34	0.2	61	0.4
累計	63,976		20,005		15,820		133		1,138		59,483		50,930	

図表 11 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
ドラマ・映画	5	体験	1
漫画・アニメ	4	ウィキペディア	1
裁判傍聴・裁判所	4	講演会	1
警察	3	大学の授業	1
YouTube	3	経験者	1
ゲーム	3	親	1
音楽	2	物心	1
学校の先生	2	その他	11
留学先	2	無効	1
クラブの大会	1		

(11) 薬物の怖さについての更なる学習意向

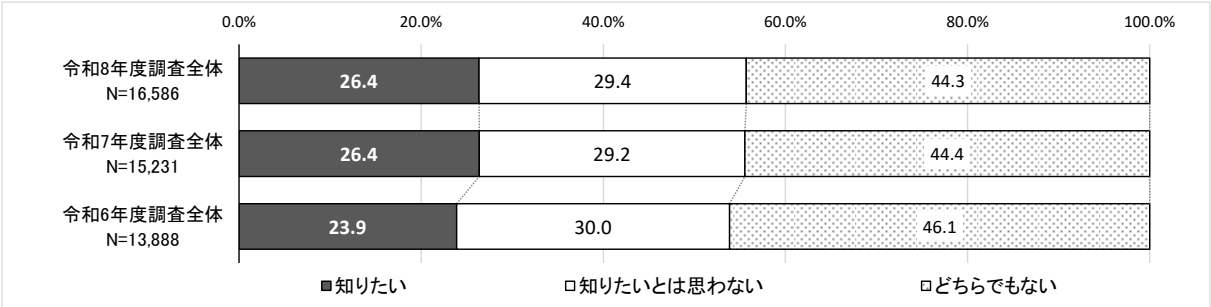
質問 10 あなたは、これらの薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）をもっと知りたいですか。（1つ選択）

質問 4 で提示した薬物を使うことの怖さ（有害性、危険性）について、もっと知りたいかを尋ねたところ、「どちらでもない」の回答割合が 44.3%と最も高く、次いで「知りたいとは思わない」が 29.4%、「知りたい」が 26.4%となっている。

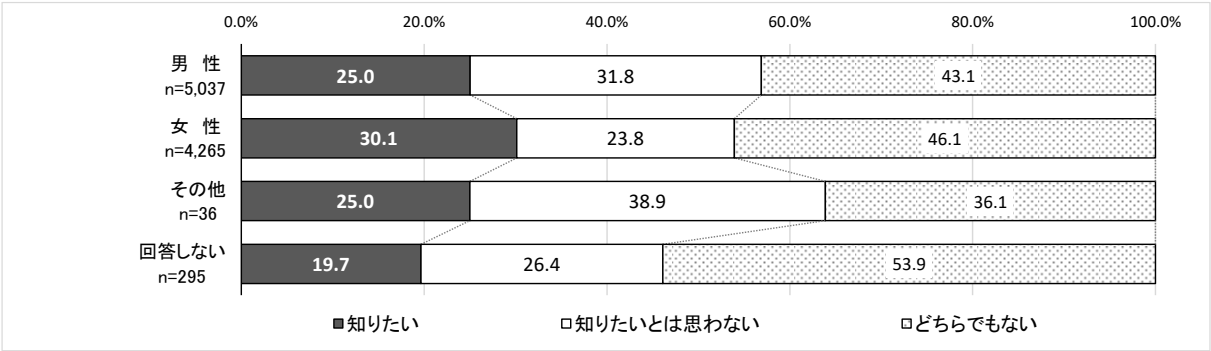
過去 2 年間の調査結果と同様である。

性別にみると、「女性」は他に比べて「知りたい」の回答割合が高く、「回答しない」とした人では、「どちらでもない」が 53.9%と最も高い。

図表 12 薬物の怖さについての更なる学習意向
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=9,633)								令和7年度調査全体		令和6年度調査全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
知りたい	4,372	26.4	1,261	25.0	1,285	30.1	9	25.0	58	19.7	4,018	26.4	3,318	23.9
知りたいとは思わない	4,868	29.4	1,604	31.8	1,015	23.8	14	38.9	78	26.4	4,443	29.2	4,164	30.0
どちらでもない	7,346	44.3	2,172	43.1	1,965	46.1	13	36.1	159	53.9	6,770	44.4	6,406	46.1

(12) 薬物の害を学ぶ場

質問 11 あなたは、これらの薬物を使った場合の害について学ぶとしたらどこがよいと思いますか。(複数選択可)

質問 4 で提示した薬物を使った場合の害について学ぶ場としては、「大学(講演会、ビデオ、リーフレット)」の回答割合が 51.3%と最も高く、「インターネット」が 30.8%、「警察」が 22.9%となっている。

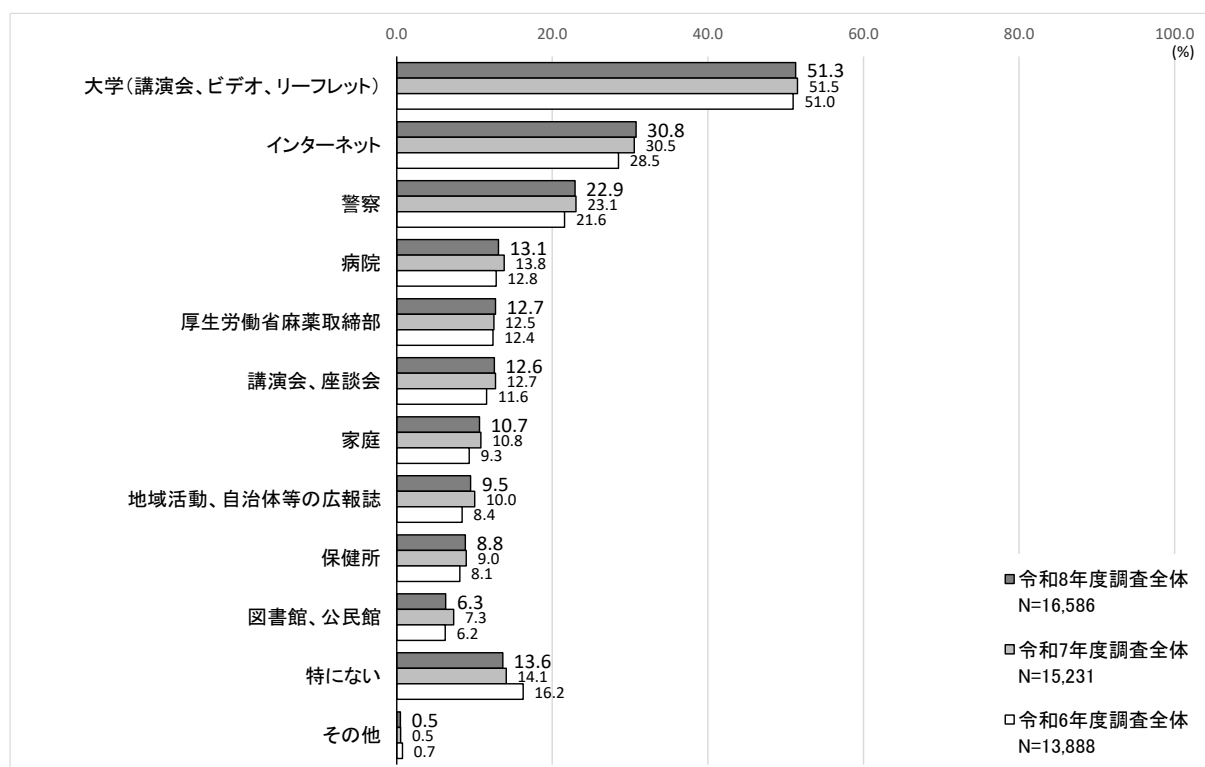
過去 2 年の調査と同様の傾向である。

性別にみると、「女性」は、「大学(講演会、ビデオ、リーフレット)」の回答割合が他に比べて高い。

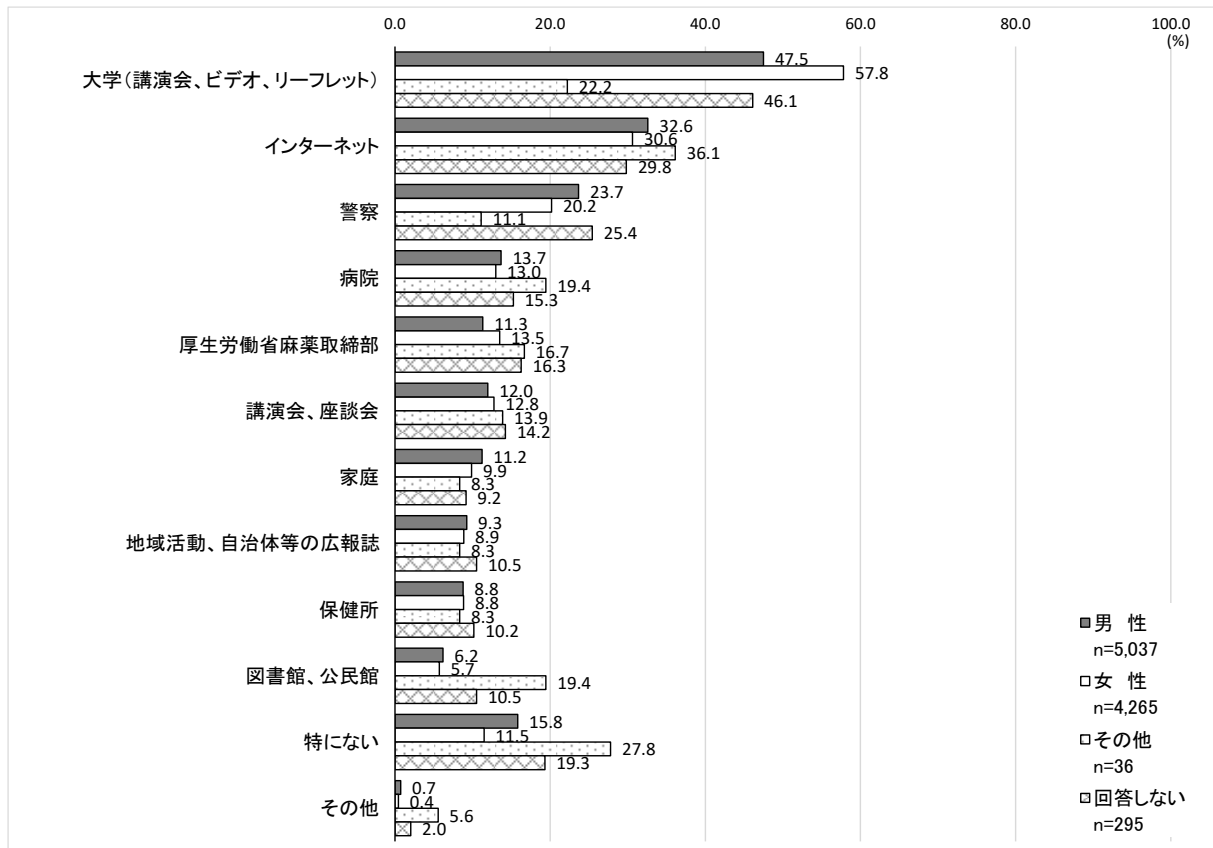
「その他」として記載された内容をみると、小・中・高校・大学など学校で学ぶのが望ましいとする回答が多い。また、「当事者の講演・体験談」と具体的な事例や実体験に触れる場を挙げる回答や、「テレビ・ネット等のメディア」、「ニュース・コマーシャル」を通じた情報提供を挙げる回答もみられた。

図表 13 薬物の害を学ぶ場

《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査		令和6年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
大学(講演会、ビデオ、リーフレット)	8,508	51.3	2,392	47.5	2,466	57.8	8	22.2	136	46.1	7,847	51.5	7,078	51.0
家庭	1,768	10.7	565	11.2	421	9.9	3	8.3	27	9.2	1,649	10.8	1,295	9.3
地域活動、自治体等の広報誌	1,577	9.5	466	9.3	378	8.9	3	8.3	31	10.5	1,527	10.0	1,170	8.4
図書館、公民館	1,045	6.3	312	6.2	244	5.7	7	19.4	31	10.5	1,116	7.3	866	6.2
保健所	1,464	8.8	442	8.8	377	8.8	3	8.3	30	10.2	1,364	9.0	1,126	8.1
警察	3,803	22.9	1,192	23.7	861	20.2	4	11.1	75	25.4	3,512	23.1	2,998	21.6
厚生労働省麻薬取締部	2,107	12.7	570	11.3	575	13.5	6	16.7	48	16.3	1,902	12.5	1,718	12.4
病院	2,171	13.1	689	13.7	554	13.0	7	19.4	45	15.3	2,104	13.8	1,775	12.8
インターネット	5,104	30.8	1,642	32.6	1,306	30.6	13	36.1	88	29.8	4,653	30.5	3,959	28.5
講演会、座談会	2,082	12.6	603	12.0	544	12.8	5	13.9	42	14.2	1,933	12.7	1,605	11.6
特にない	2,261	13.6	797	15.8	490	11.5	10	27.8	57	19.3	2,143	14.1	2,256	16.2
その他	81	0.5	37	0.7	19	0.4	2	5.6	6	2.0	79	0.5	102	0.7
累計	31,971		9,707		8,235		71		616		29,829		25,948	

図表 14 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
学校(小・中・高校・大学いずれかを含む)	36	SNS・YouTube	3
研究所	1	(車内)ポスター	2
幼少期から	1	どこでもよい	2
親	1	簡単に学べるところ	1
当事者の講演・体験談	12	裁判所	1
テレビ、ネット等のメディア	11	体験	1
アニメ・漫画・ドラマ	4	何度も聞いているのもう必要ない	1
ニュース・コマーシャル	3	わからない	1

(13) 薬物使用者が増加している理由

質問 12 あなたは、これらの薬物を使う人が増えているのはどのような理由からだと思いますか。(複数選択可)

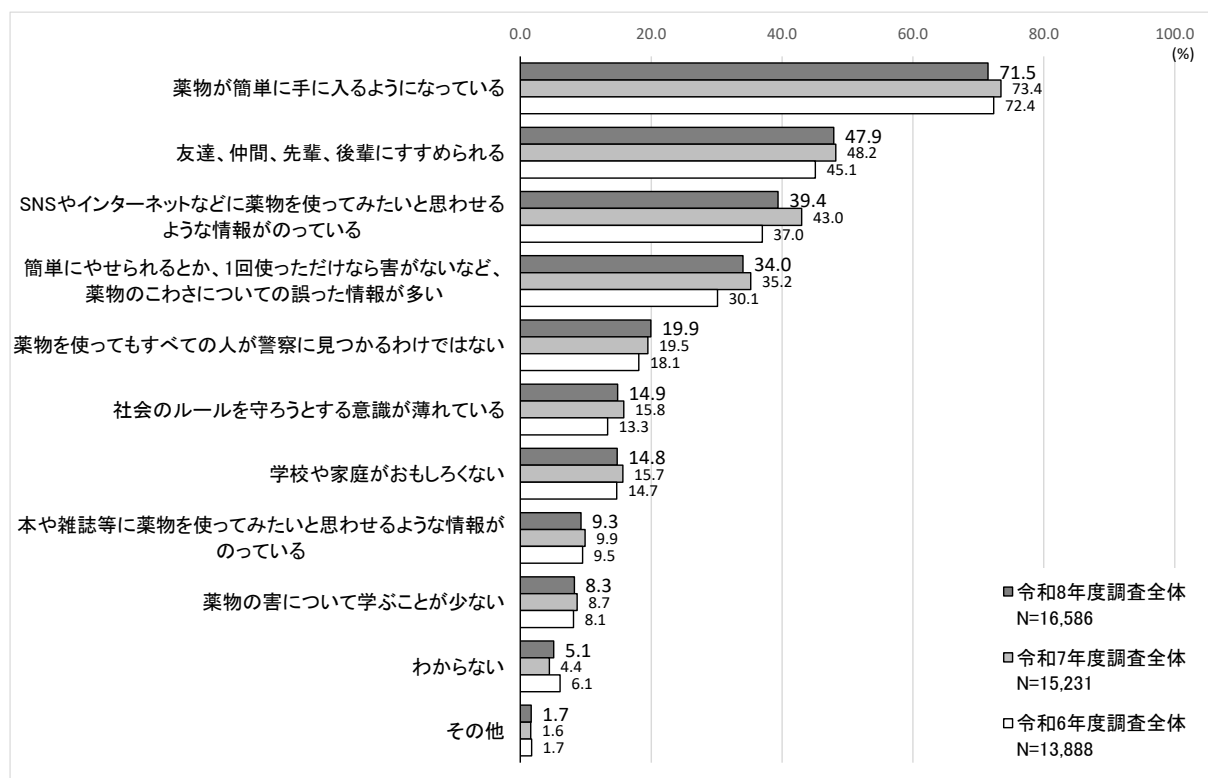
質問 4 で提示した薬物を使う人が増えている理由として、「薬物が簡単に手に入るようになっている」が 71.5%、「友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる」が 47.9%、「SNS やインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている」が 39.4%、「簡単にやせられるとか、1 回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い」が 34.0%となっている。

昨年度調査に比べて、「薬物が簡単に手に入るようになっている」の回答割合がやや低く、「SNS やインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている」の回答割合も低くなっている。

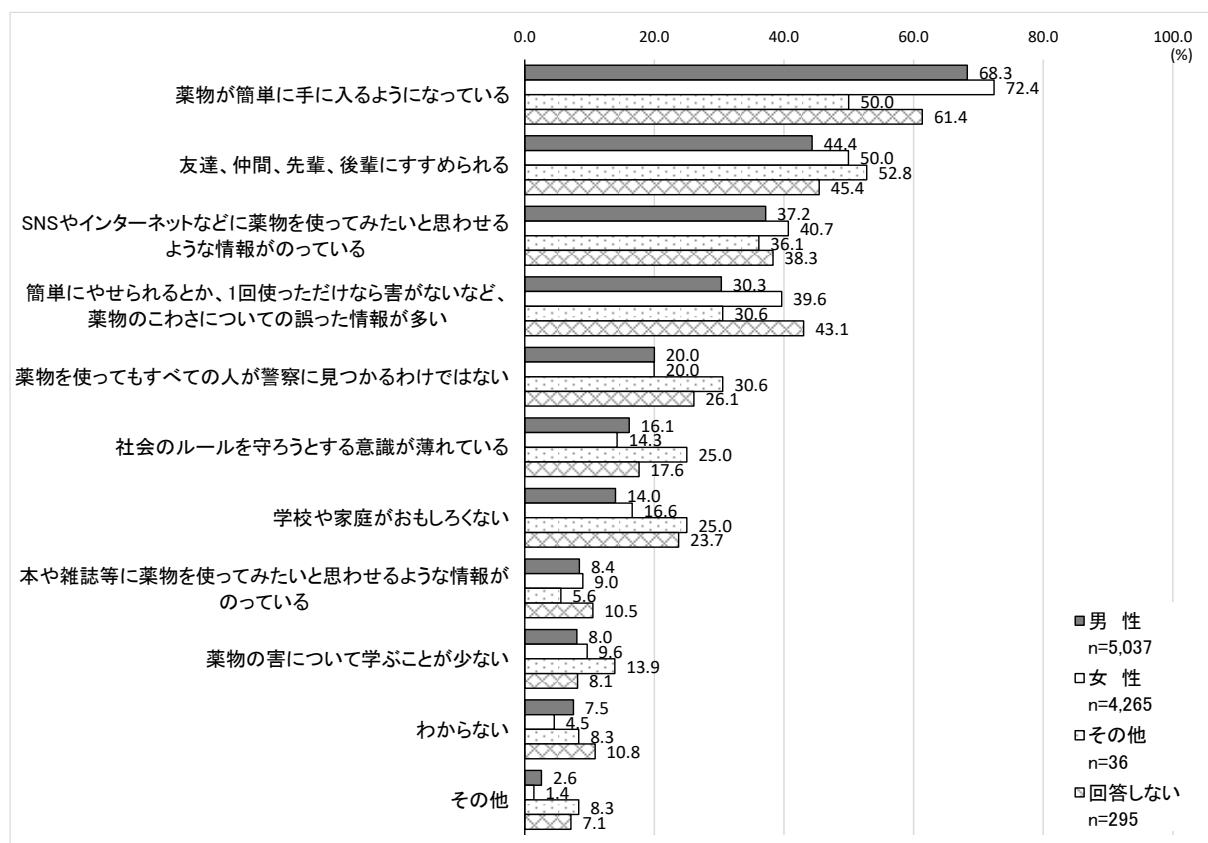
性別にみると、「女性」は、「薬物が簡単に手に入るようになっている」、「SNS やインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている」の回答割合が、他に比べて高い。

「その他」として記載された内容をみると、「現実逃避」、「ストレス（社会）」、「社会の問題」、「生きづらさ」、「精神的な問題」など、社会的背景や心理的要因に着目した回答が多くみられる。一方で、「バカだから」、「興味本位・好奇心」、「かつこいいと勘違い」など、薬物を使用する人個人の行動や判断を問題視する回答もみられた。また、「ネット（ダークウェブ等）からの情報」、「誤った情報の流布」や「入手が容易になっている」など、情報環境や薬物の入手しやすさに言及する回答もみられた。

図表 15 薬物使用者が増加している理由
 ≪3 か年調査比較≫



≪性別比較≫



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体		令和6年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
薬物が簡単に手に入るようになっている	11,855	71.5	3,440	68.3	3,089	72.4	18	50.0	181	61.4	11,186	73.4	10,049	72.4
本や雑誌等に薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている	1,539	9.3	425	8.4	382	9.0	2	5.6	31	10.5	1,508	9.9	1,321	9.5
SNSやインターネットなどに薬物を使ってみたいと思わせるような情報がのっている	6,534	39.4	1,872	37.2	1,735	40.7	13	36.1	113	38.3	6,550	43.0	5,135	37.0
社会のルールを守ろうとする意識が薄れている	2,466	14.9	812	16.1	608	14.3	9	25.0	52	17.6	2,410	15.8	1,852	13.3
薬物を使ってもすべての人が警察に見つかるわけではない	3,307	19.9	1,007	20.0	852	20.0	11	30.6	77	26.1	2,967	19.5	2,515	18.1
簡単にやせられるとか、1回使っただけなら害がないなど、薬物のこわさについての誤った情報が多い	5,641	34.0	1,528	30.3	1,691	39.6	11	30.6	127	43.1	5,364	35.2	4,185	30.1
薬物の害について学ぶことが少ない	1,371	8.3	405	8.0	410	9.6	5	13.9	24	8.1	1,321	8.7	1,127	8.1
友達、仲間、先輩、後輩にすすめられる	7,943	47.9	2,234	44.4	2,131	50.0	19	52.8	134	45.4	7,341	48.2	6,263	45.1
学校や家庭がおもしろくない	2,456	14.8	705	14.0	707	16.6	9	25.0	70	23.7	2,386	15.7	2,046	14.7
わからない	849	5.1	378	7.5	194	4.5	3	8.3	32	10.8	674	4.4	844	6.1
その他	277	1.7	130	2.6	60	1.4	3	8.3	21	7.1	243	1.6	239	1.7
累計	44,238		12,936		11,859		103		862		41,950		35,576	

図表 16 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
現実逃避	37	HIPHOP,アニメ等の影響	2
ストレス(社会)	35	薬物使用の効用に関する記述が誘導	2
社会の問題	30	断れない	2
生きづらさ	20	海外からの密輸・持ち込みの増加	2
精神的な問題	19	移民の影響	2
(合法と)騙された	16	(刑が軽い等)法の課題	2
バカだから	12	相談できない社会	1
興味本位・好奇心	12	警察の検挙力の向上	1
カッコいいと勘違い	11	社会秩序の崩壊	1
置かれている環境(家庭)	8	取り締まりの不備	1
ネット(ダークウェブ等)からの情報	8	薬物を軽んじている	1
誤った情報の流布	7	若気の至り	1
自暴自棄	5	法を犯したい	1
将来への不安	5	薬物利用をステータスと勘違い	1
判断能力の低下	4	自己陶酔	1
心・意思の弱さ	3	脅迫等の負の連鎖	1
入手が容易になっている	3	反社の存在	1
金銭がらみ	3	高値で売れるから	1
医薬品への混入	2	海外観光客の影響	1
強要されて	2	海外との交流	1
あこがれて	2	海外で経験	1
刺激をもとめて	2	悪影響	1
自制心のなさ	2	その他	1

(14) 薬物使用についての考え

質問 13 あなたは、これらの薬物を使うことについてどのように考えていますか。
(1つ選択)

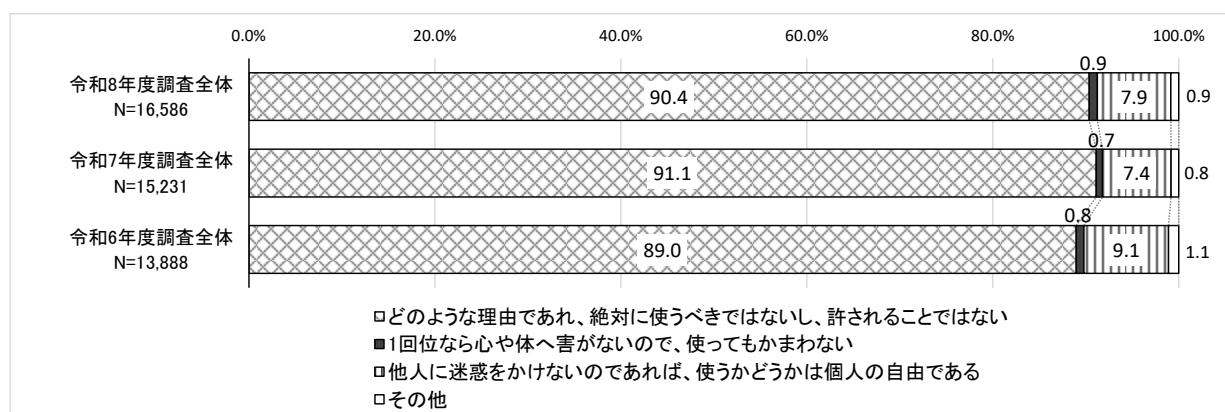
質問 4 で提示した薬物を使うことについての回答者の考えについては、90.4%が「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」と回答している。なお、「他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である」が 7.9%、「1 回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない」が 0.9%である。

過去 2 年の調査と比べると、ほぼ同様の結果となっている。

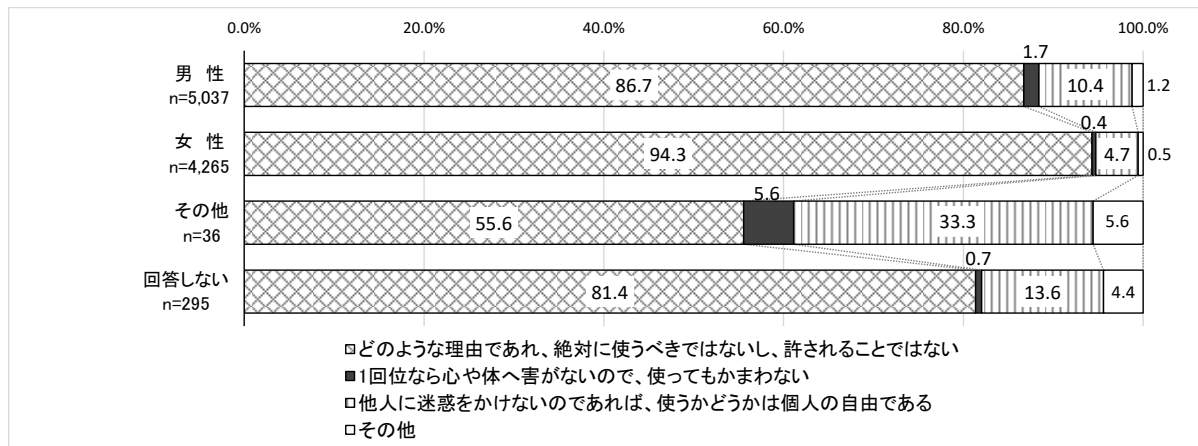
性別にみると、「どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない」の割合は、「女性」が他に比べて高い。一方で「他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である」とした回答割合は、「男性」が 10.4%、「回答しない」とした人が 13.6%と他より高い。

「その他」として記載された内容をみると、「医療的使用は容認」、「医療使用以外は使用すべきでない」、「日本の法律を遵守すべき」、「よくない」とする回答が多い。一方で「自己責任」や「合法的な国での使用は容認」との回答もある。また、「使用せざるを得ない人もいる」、「社会にも問題がある」など、社会的な生きづらさに着目した回答もある。また、「使用者のセーフティネットも設定すべき」、「使用する必要のない社会をつくるべき」など、社会的な支援体制の必要性を訴える回答もある。

図表 17 薬物使用についての考え
《3 か年調査比較》



<<性別比較>>



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体		令和6年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
どのような理由であれ、絶対に使うべきではないし、許されることではない	14,987	90.4	4,369	86.7	4,023	94.3	20	55.6	240	81.4	13,878	91.1	12,356	89.0
1回位なら心や体へ害がないので、使ってもかまわない	147	0.9	84	1.7	18	0.4	2	5.6	2	0.7	102	0.7	116	0.8
他人に迷惑をかけないのであれば、使うかどうかは個人の自由である	1,311	7.9	522	10.4	201	4.7	12	33.3	40	13.6	1,125	7.4	1,263	9.1
その他	141	0.9	62	1.2	23	0.5	2	5.6	13	4.4	126	0.8	153	1.1

図表 18 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
医療使用は容認	17	自殺よりはまし	1
医療使用以外は使用すべきでない	12	鬱になっていたらわからない	1
使用目的による	1	自殺を考える場合は使用するかもしれない	1
日本の法律を遵守すべき	8	薬物によりけりだ	1
よくない	7	断言できない	1
使うべきでない	2	使用目的と結果次第	1
自分は使わない	2	法規制の現状を見直すべき	1
治安維持のために断固使用不可を貫くべき	1	使用者のセーフティネットも設定すべき	5
合法的な国での使用は容認	9	使用する必要のない社会をつくるべき	2
自己責任	8	簡単に入手できる社会も問題	1
迷惑をかけないなら自己責任	5	判断できないものは使うべきでない	1
自分に影響がなければ自己責任	2	捕まらなければよい	1
他人に迷惑をかけたら処罰されるべき	2	合法的な国の国籍を持っている人は別	1
周りの人間にも迷惑をかける	1	残念	1
バカなこと	5	わからない	8
使用者を理解できない	3	(関心がないので)どうでもいい	6
心が弱い	2	興味・関心ない	5
自業自得	2	関わりたくない	1
使用せざるを得ない人もいる	8	ない	1
社会にも問題がある	2	無効	1
生活のしづらさ等から一定程度の使用者がでるのは仕方ない	1		

(15) 薬物使用の現場に居合わせたことの有無

質問 14 (ア) あなたは、これらの薬物が使用されているところを直接見たことがありますか。〈テレビ、映画、インターネット、報道等で見たものは除きます〉(どちらかを選択)

【質問 14 (ア) で「2 ある」を選択した人だけお答えください】

(イ) どこで見ましたか (複数選択可)

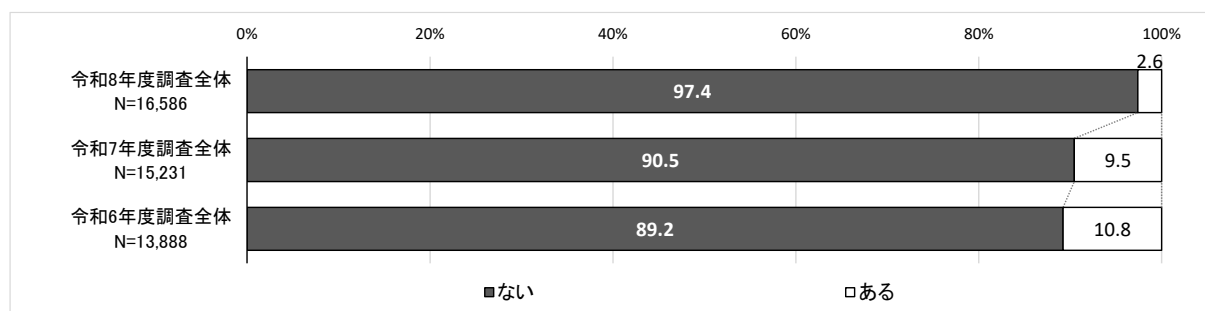
質問 4 で提示した薬物が使用されているところを直接見たことがあるかについては、97.4%が「ない」と回答した一方、2.6%が「ある」と回答しており、100 人のうち約 3 人が薬物使用の現場を目撃した、または居合わせたことになる。

過去 2 年の調査と比べて、「ない」の回答割合が高くなっている。

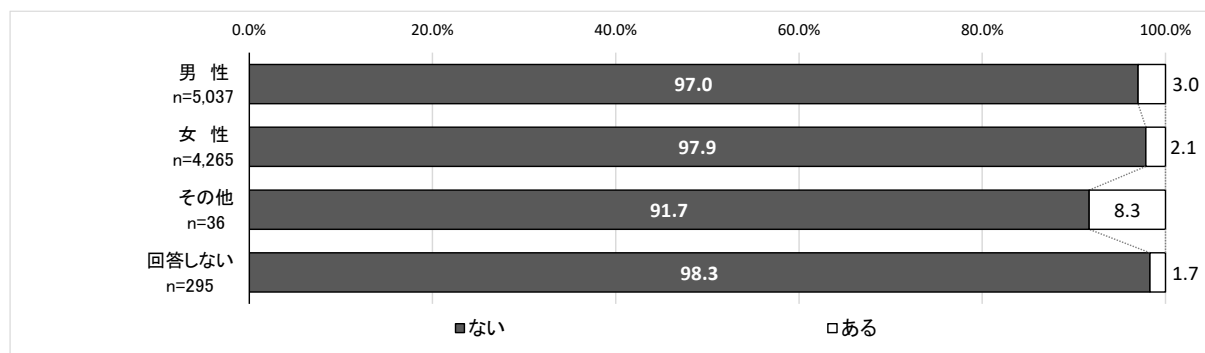
性別による差はみられない。

図表 19 薬物使用の現場に居合わせたことの有無

《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

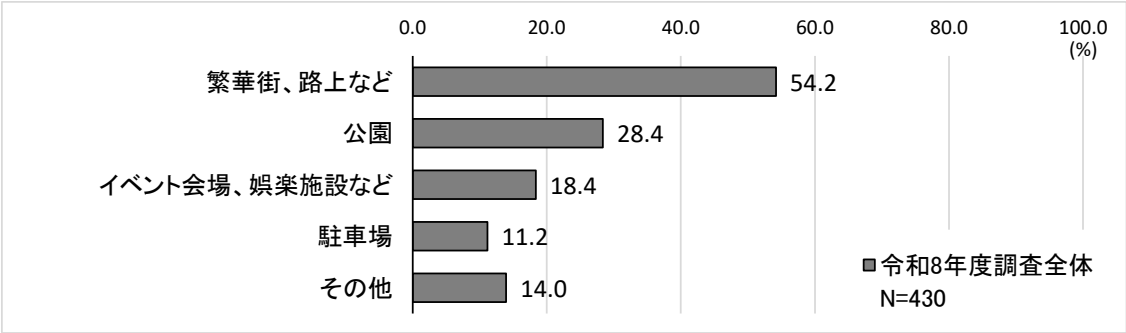
	令和8年度調査		大学コンソーシアム大阪調査 (N=9,633)								令和7年度調査		令和6年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
ない	16,156	97.4	4,886	97.0	4,174	97.9	33	91.7	290	98.3	13,778	90.5	12,393	89.2
ある	430	2.6	151	3.0	91	2.1	3	8.3	5	1.7	1,453	9.5	1,495	10.8

薬物が使用されているところをどこで見たかについては、「繁華街、路上など」が54.2%、次いで「公園」が28.4%、「イベント会場、娯楽施設など」が18.4%、「駐車場」が11.2%であった。

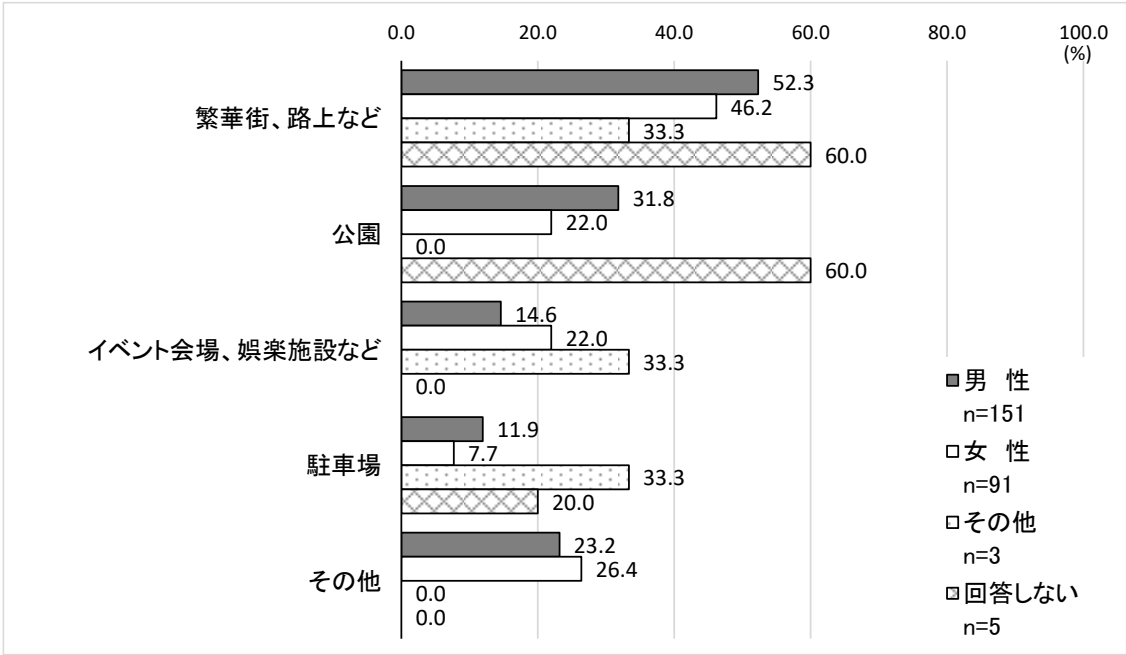
性別にみると、「回答しない」とした人では、「繁華街、路上など」と「公園」が6割と他に比べて高い。また、「男性」も「繁華街、路上など」が5割以上であった。

「その他」として記載された内容をみると、「海外」が多く、「高校・学校」や「家・自宅」を挙げる回答も複数みられた。「商店街の路地」、「銀行裏」、「空港周辺」といった具体的な場所も挙げられている。

図表 20 薬物使用をどこで見たか



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=9,633)							
			男性		女性		その他		回答しない	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	430		151		91		3		5	
繁華街、路上など	233	54.2	79	52.3	42	46.2	1	33.3	3	60.0
公園	122	28.4	48	31.8	20	22.0	0	0.0	3	60.0
駐車場	48	11.2	18	11.9	7	7.7	1	33.3	1	20.0
イベント会場、娯楽施設など	79	18.4	22	14.6	20	22.0	1	33.3	0	0.0
その他	60	14.0	35	23.2	24	26.4	0	0.0	0	0.0
累計	542		202		113		3		7	

図表 21 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
海外	20	テレビ・ニュース	5
高校・学校	10	SNS	4
友人が使用	5	映画・ドラマ	3
家・自宅	3	ゲーム	1
商店街の路地	1	ビデオ	1
銀行裏	1	写真	1
空港周辺	1	その他	3
車	1		

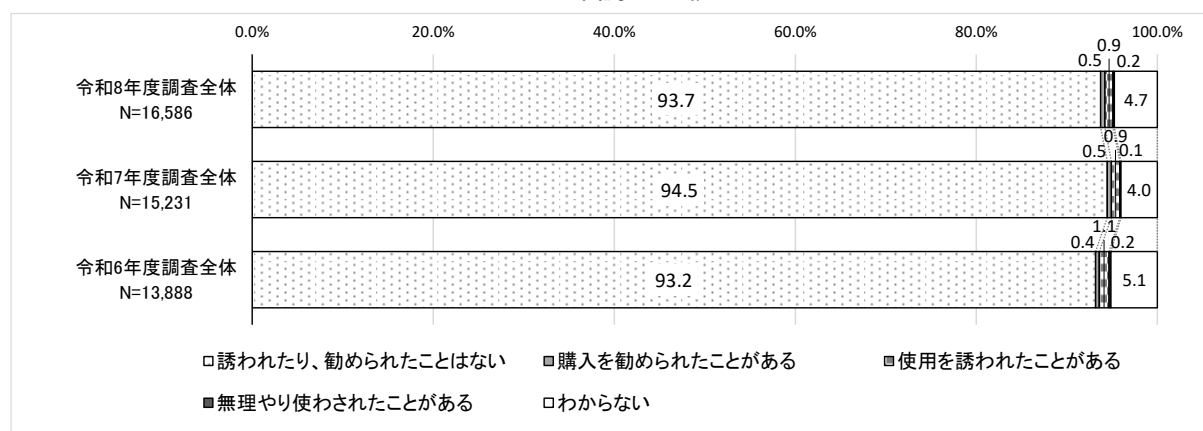
(16) 薬物使用等の勧誘経験の有無

質問 15 あなたは、これらの薬物を使用することや購入することを誘われたり、勧められたりすることが、これまでにありましたか。(1つ選択)

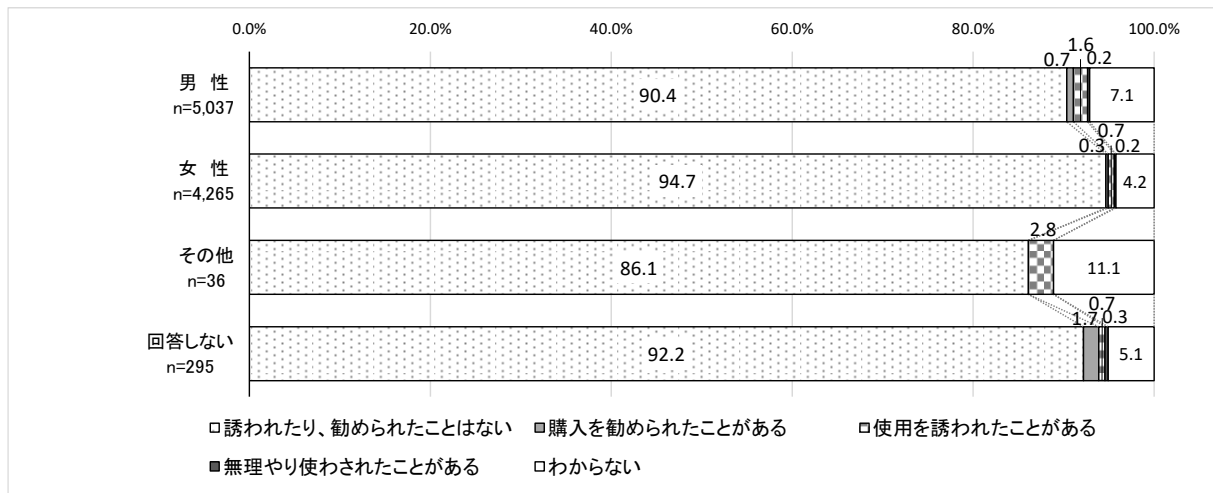
質問 4 で提示した薬物の使用や購入を誘われたり、勧められた経験については、93.7%が「誘われたり、勧められたことはない」と回答した。一方で、「ある」(「購入を勧められたことがある」、「使用を誘われたことがある」、「無理やり使わされたことがある」の合計)は1.6%であり、100 人のうち約 2 人が薬物購入や使用の勧誘を受けた経験があることになる。

なお、この傾向は過去 2 年の調査と同様である。

性別にみると、「誘われたり、勧められたことはない」の割合は、「女性」が他に比べてやや高い。一方、「ある」の回答割合は、「男性」および性別を「回答しない」とした人が、「女性」よりやや高い。

図表 22 薬物使用等の勧誘経験の有無
《3 か年調査比較》

《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体		令和6年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
誘われたり、勧められたことはない	15,546	93.7	4,551	90.4	4,038	94.7	31	86.1	272	92.2	14,386	94.5	12,941	93.2
購入を勧められたことがある	80	0.5	37	0.7	11	0.3	0	0.0	5	1.7	71	0.5	55	0.4
使用を誘われたことがある	147	0.9	79	1.6	29	0.7	1	2.8	2	0.7	142	0.9	150	1.1
無理やり使わされたことがある	26	0.2	11	0.2	7	0.2	0	0.0	1	0.3	18	0.1	31	0.2
わからない	787	4.7	359	7.1	180	4.2	4	11.1	15	5.1	614	4.0	711	5.1

(17) 薬物使用を勧誘された時の行動

質問 16 あなたは、これらの薬物を使用することを誰かに誘われたら、どのように行動しますか。(複数回答可)

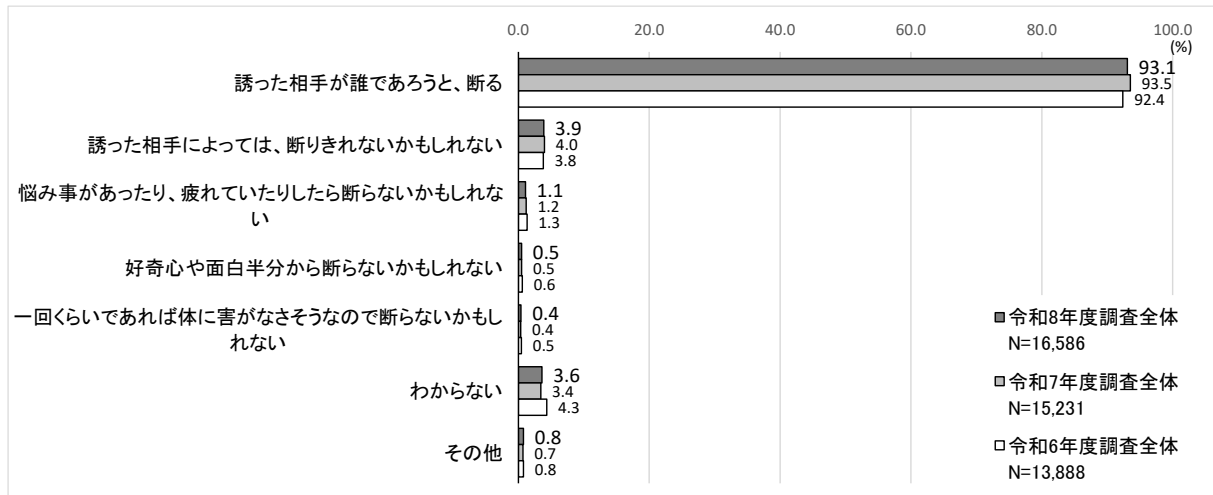
質問 4 で提示した薬物を使用することを誰かに誘われた場合、93.1%が「誘った相手が誰であろうと、断る」と回答している。一方で、「誘った相手によっては、断りきれないかもしれない」が3.9%、「悩み事があったり、疲れていたりしたら断らないかもしれない」が1.1%となっている。

過去2年の調査と同様に、状況によっては使用の可能性を示唆する回答がみられた。

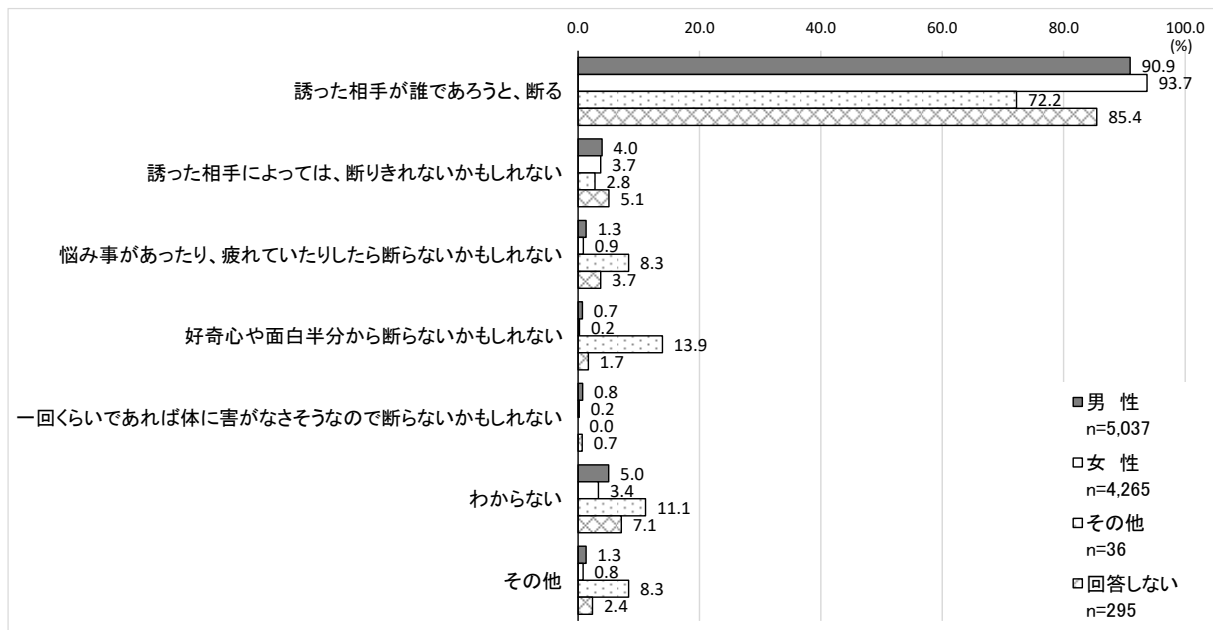
性別にみると、「誘った相手が誰であろうと、断る」の回答割合は、「女性」が他に比べてやや高く、「回答しない」とした人がやや低い。

「その他」として記載された内容をみると、警察への相談・通報や「縁を切る」といった回答が多くみられる一方、「断れないかもしれない」、「断らないかもしれない」など、誘いを断ることへの不安を示す回答もみられた。

図表 23 薬物使用を勧誘された時の行動
 ≪3 か年調査比較≫



≪性別比較≫



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=9,633)								令和7年度調査全体		令和6年度調査全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
誘った相手が誰であろうと、断る	15,437	93.1	4,581	90.9	3,997	93.7	26	72.2	252	85.4	14,244	93.5	12,830	92.4
誘った相手によっては、断りきれないかもしれない	644	3.9	199	4.0	159	3.7	1	2.8	15	5.1	608	4.0	530	3.8
一回くらいであれば体に害がなさそうなので断らないかもしれない	65	0.4	38	0.8	8	0.2	0	0.0	2	0.7	55	0.4	66	0.5
好奇心や面白半分から断らないかもしれない	82	0.5	36	0.7	10	0.2	5	13.9	5	1.7	76	0.5	81	0.6
悩み事があったり、疲れていたりしたら断らないかもしれない	179	1.1	67	1.3	37	0.9	3	8.3	11	3.7	183	1.2	184	1.3
わからない	599	3.6	254	5.0	143	3.4	4	11.1	21	7.1	520	3.4	604	4.3
その他	128	0.8	66	1.3	35	0.8	3	8.3	7	2.4	107	0.7	108	0.8
累計	17,134		5,241		4,389		42		313		15,793		14,403	

図表 24 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
警察に通報・連行する	31	縁を切る	21
通報する	17	逃げる	6
警察に相談する	7	関わらない	4
親・周りの大人に相談する	3	無視する	1
関係機関に通報する	3	話だけ聞き離れる	1
関係機関に相談する	2	受け取って捨てる	1
警察に出頭させる	1	断れないかもしれない	7
密告する	1	断らないかもしれない	2
親に相談	1	薬物による	2
殴る	8	想定不可	1
やめるよう説得する	4		
断る	4		

(18) 周囲での薬物所持・使用者の有無

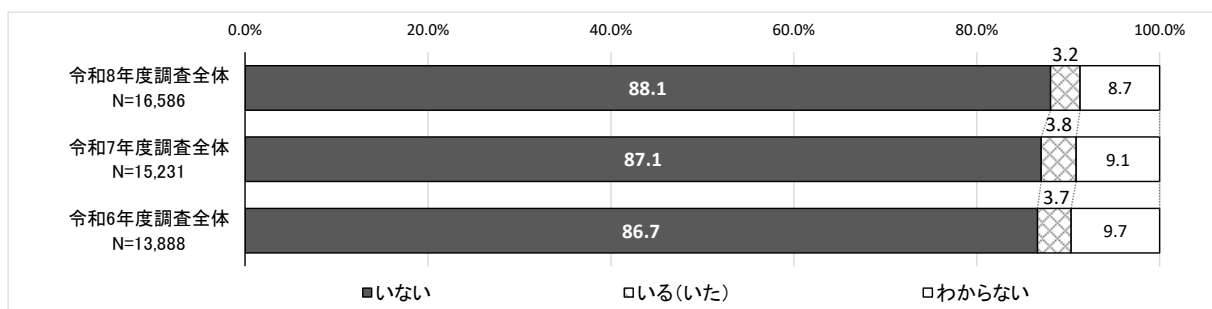
質問 17(ア) あなたの身近な周囲に、これらの薬物を所持したり、使用している（いた）人がいますか。（1つ選択）

【質問 17(ア)で「2 いる（いた）」を選択した人だけお答えください。】

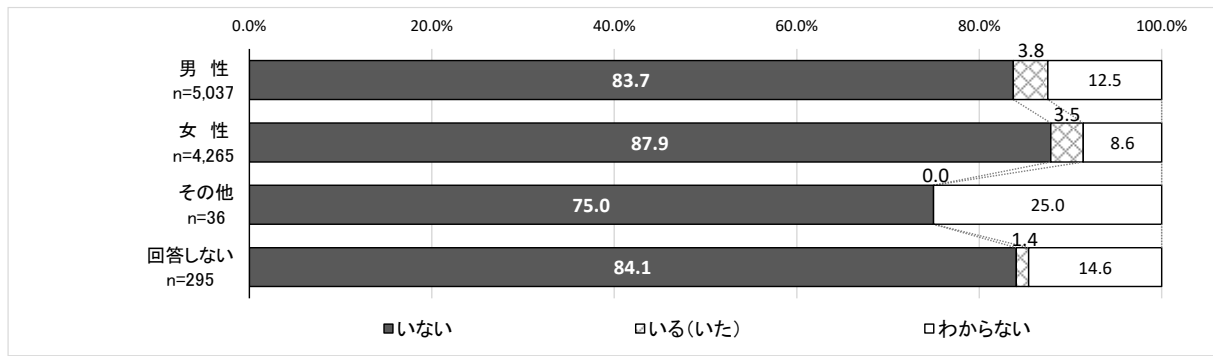
（イ） どの薬物でしたか。（複数回答可）

身近な周囲に、質問 4 で提示した薬物を所持したり、使用している（いた）人がいるかについては、88.1%と大半が「いない」と回答した。一方で、3.2%が「いる（いた）」と回答しており、100 人のうち 3 人以上が所持・使用者を知っている状況にある。これは過去 2 年の調査と同様である。

性別にみると、「いない」と回答した割合は「女性」が他に比べてやや高い。一方、「わからない」と回答した割合は、性別を「回答しない」とした人が他より高い。

図表 25 周囲での薬物所持・使用者の有無
《3 か年調査比較》

《性別比較》



(設問順)

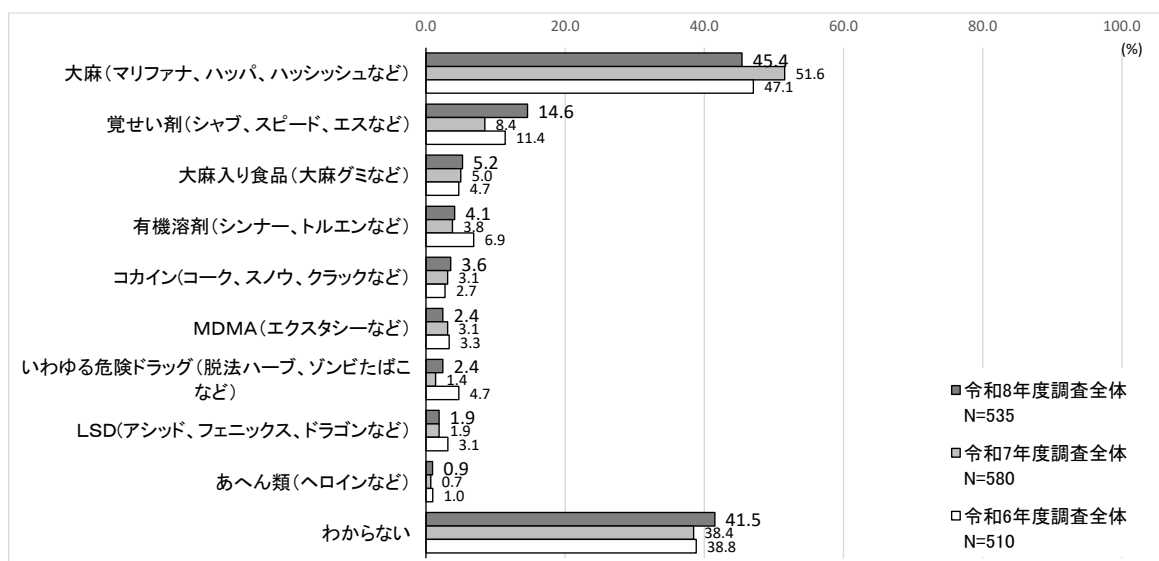
	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査全体		令和6年度調査全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
いらない	14,609	88.1	4,218	83.7	3,747	87.9	27	75.0	248	84.1	13,260	87.1	12,034	86.7
いる(いた)	535	3.2	191	3.8	151	3.5	0	0.0	4	1.4	580	3.8	510	3.7
わからない	1,442	8.7	628	12.5	367	8.6	9	25.0	43	14.6	1,391	9.1	1,344	9.7

周囲に所持・使用している人が「いる(いた)」と回答した人に対し、所持・使用されていた薬物をたずねたところ、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)」の割合が45.4%と最も高い。次いで「覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)」(14.6%)、「大麻入り食品(大麻グミなど)」(5.2%)である。なお、「わからない」は41.5%である。

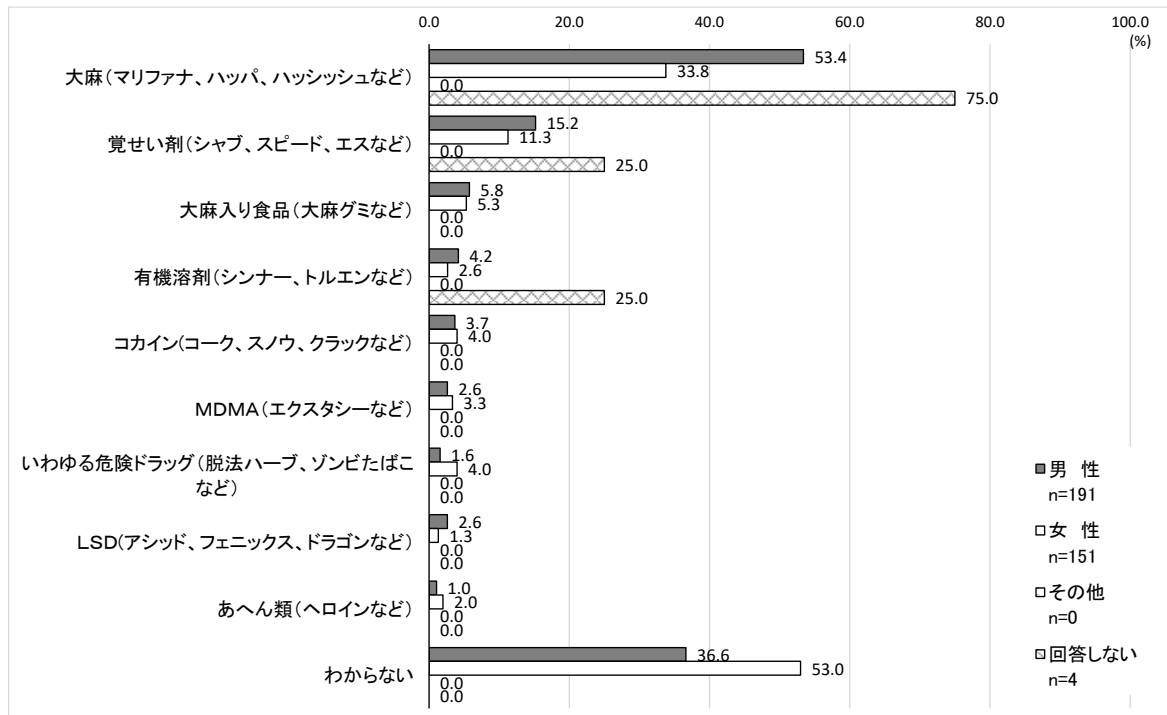
昨年度の調査と比較すると、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)」の回答割合が低く、「MDMA(エクスタシーなど)」もやや低くなっている。一方で「覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)」の回答割合が高い。また、「わからない」の回答割合もやや高い。

性別にみると、「男性」と「回答しない」とした人では、「大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシッシュなど)」の回答割合が他に比べて高い。また「回答しない」とした人では、「覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)」と「有機溶剤(シンナー、トルエンなど)」を挙げる割合もみられた。

図表 26 使用していた薬物
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査		令和6年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	535		191		151		0		4		580		510	
有機溶剤(シンナー、トルエンなど)	22	4.1	8	4.2	4	2.6	0	0.0	1	25.0	22	3.8	35	6.9
覚せい剤(シャブ、スピード、エスなど)	78	14.6	29	15.2	17	11.3	0	0.0	1	25.0	49	8.4	58	11.4
大麻(マリファナ、ハッパ、ハッシュシュなど)	243	45.4	102	53.4	51	33.8	0	0.0	3	75.0	299	51.6	240	47.1
コカイン(コーク、スノウ、クラックなど)	19	3.6	7	3.7	6	4.0	0	0.0	0	0.0	18	3.1	14	2.7
あへん類(ヘロインなど)	5	0.9	2	1.0	3	2.0	0	0.0	0	0.0	4	0.7	5	1.0
LSD(アシッド、フェニックス、ドラゴンなど)	10	1.9	5	2.6	2	1.3	0	0.0	0	0.0	11	1.9	16	3.1
MDMA(エクスタシーなど)	13	2.4	5	2.6	5	3.3	0	0.0	0	0.0	18	3.1	17	3.3
いわゆる危険ドラッグ(脱法ハーブ、ゾンビたばこなど)	13	2.4	3	1.6	6	4.0	0	0.0	0	0.0	8	1.4	24	4.7
大麻入り食品(大麻グミなど)	28	5.2	11	5.8	8	5.3	0	0.0	0	0.0	29	5.0	24	4.7
わからない	222	41.5	70	36.6	80	53.0	0	0.0	0	0.0	223	38.4	198	38.8
累計	653		242		182		0		5		681		631	

(19) 友人の薬物使用を知った場合の対応

質問 18 あなたは、もし友人がこれらの薬物を使用していることを知った場合、どうしますか。(複数選択可)

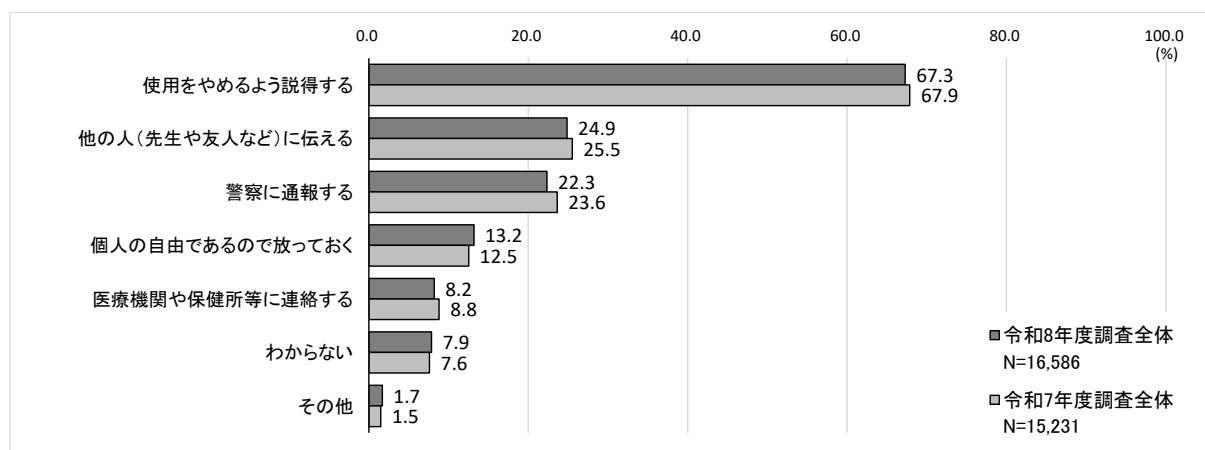
友人が質問 4 で提示した薬物を使用していることを知った場合の対応については、67.3%が「使用をやめるよう説得する」と回答した。次いで「他の人（先生や友人など）に伝える」が24.9%、「警察に通報する」が22.3%となっている。一方で、「個人の自由であるので放っておく」とした回答も13.2%みられた。

昨年度調査と同様に「使用をやめるよう説得する」が最も高い割合となっている。

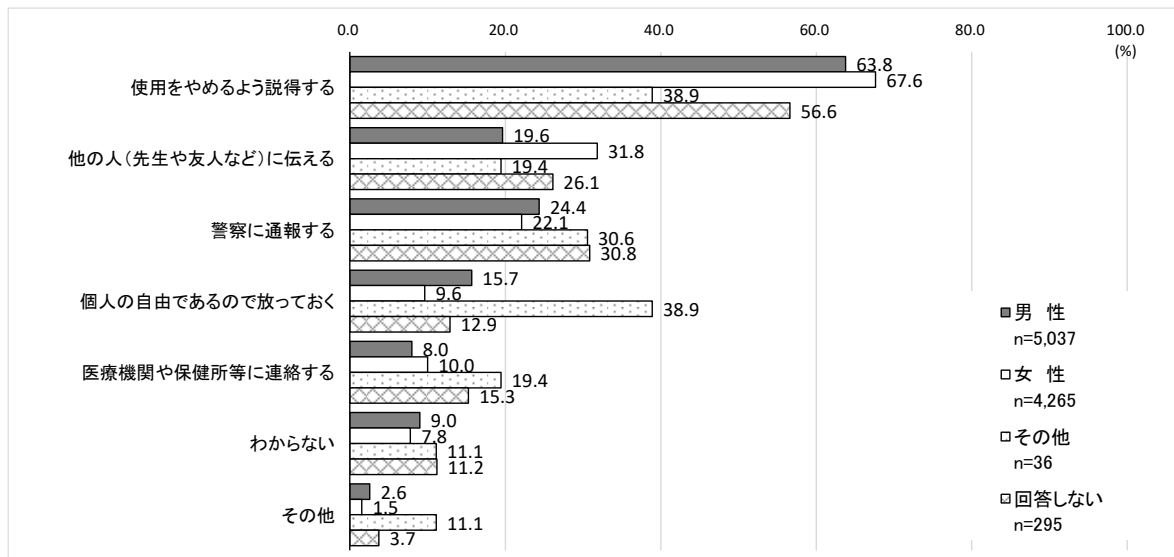
性別にみると、「女性」は、「個人の自由であるので放っておく」の割合が他に比べて低く、「使用をやめるよう説得する」、「他の人（先生や友人など）に伝える」と回答した割合が高い。また、性別を「回答しない」とした人は、「使用をやめるよう説得する」と回答した割合が他より低い。

「その他」として記載された内容として、「縁を切る」、「関わらない・距離をおく」が自由記述全体の約7割を占めた。一方で、「警察等関係機関に相談・通報」や「やめるよう説得する」、「話を聞く」、「相談にのる」といった、友人への支援を意識した回答もみられた。また、「相手による」や「何もしない・放置する」との回答もある。

図表 27 友人の薬物使用を知った場合の対応
《昨年度調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231	
使用をやめるよう説得する	11,159	67.3	3,212	63.8	2,884	67.6	14	38.9	167	56.6	10,336	67.9
他の人（先生や友人など）に伝える	4,125	24.9	989	19.6	1,357	31.8	7	19.4	77	26.1	3,887	25.5
警察に通報する	3,706	22.3	1,227	24.4	942	22.1	11	30.6	91	30.8	3,599	23.6
医療機関や保健所等に連絡する	1,360	8.2	401	8.0	426	10.0	7	19.4	45	15.3	1,342	8.8
個人の自由であるので放っておく	2,188	13.2	790	15.7	411	9.6	14	38.9	38	12.9	1,911	12.5
わからない	1,304	7.9	453	9.0	332	7.8	4	11.1	33	11.2	1,161	7.6
その他	280	1.7	129	2.6	65	1.5	4	11.1	11	3.7	228	1.5
累計	24,122		7,201		6,417		61		462		22,464	

図表 28 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
縁を切る	117	相手による	5
関わらない・距離をおく	78	逃げる・その場から離れる	2
警察等関係機関に相談・通報	15	被害が及ばないようにする	1
家族に相談する	4	使用した感想を聞く	2
親に伝える	1	薬の特性等を調べる	1
やめるよう説得する	7	海外でやれと言う	1
殴る	7	冷笑する	1
話を聞く(後に通報を含む)	6	困る	1
注意だけはする	4	関係ない	1
説得してもだめなら縁を切る	4	何もしない・放置する	6
説得してもだめなら通報する	3	何も出来ない	3
相談にのる(解決方法を探る)	3	無視する	3
説教する	1	見捨てる	1
治療につなげる	1	どうでもいい	1

(20) 薬物に関する相談窓口の認知状況

質問 19 あなたは、これらの薬物に関する相談窓口があることを知っていますか。(複数選択可)

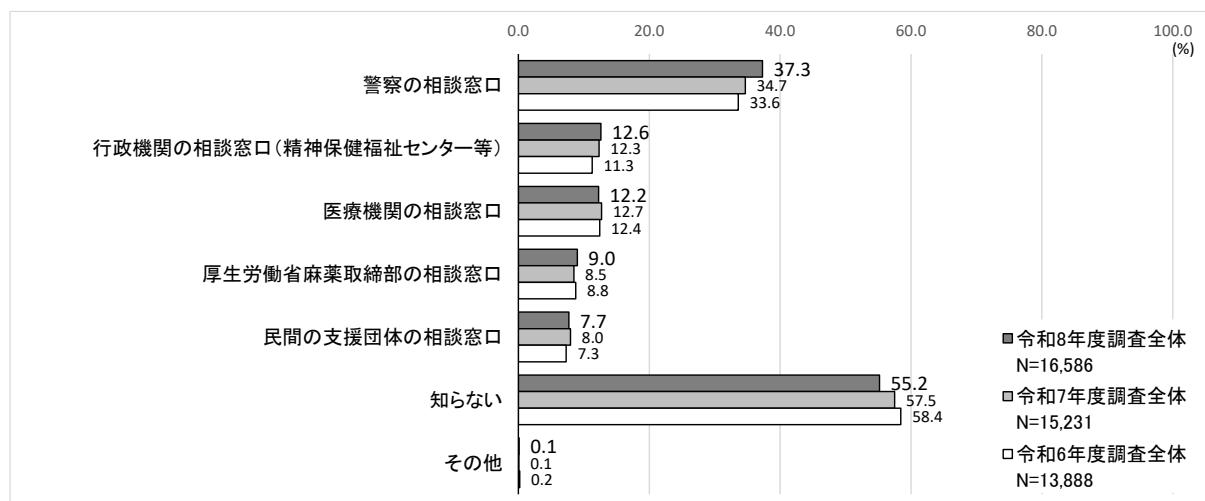
薬物に関する 5 つの相談窓口を提示し、その認知状況をたずねたところ、55.2%が「知らない」と回答している。相談窓口の中では「警察の相談窓口」が 37.3%と最も認知されている。続いて「行政機関の相談窓口」が 12.6%、「医療機関の相談窓口」が 12.2%、「厚生労働省麻薬取締部の相談窓口」が 9.0%、「民間の支援団体の相談窓口」が 7.7%である。

過去 2 年の調査と同様の結果となっているが、「警察の相談窓口」の回答割合がやや高くなっている。

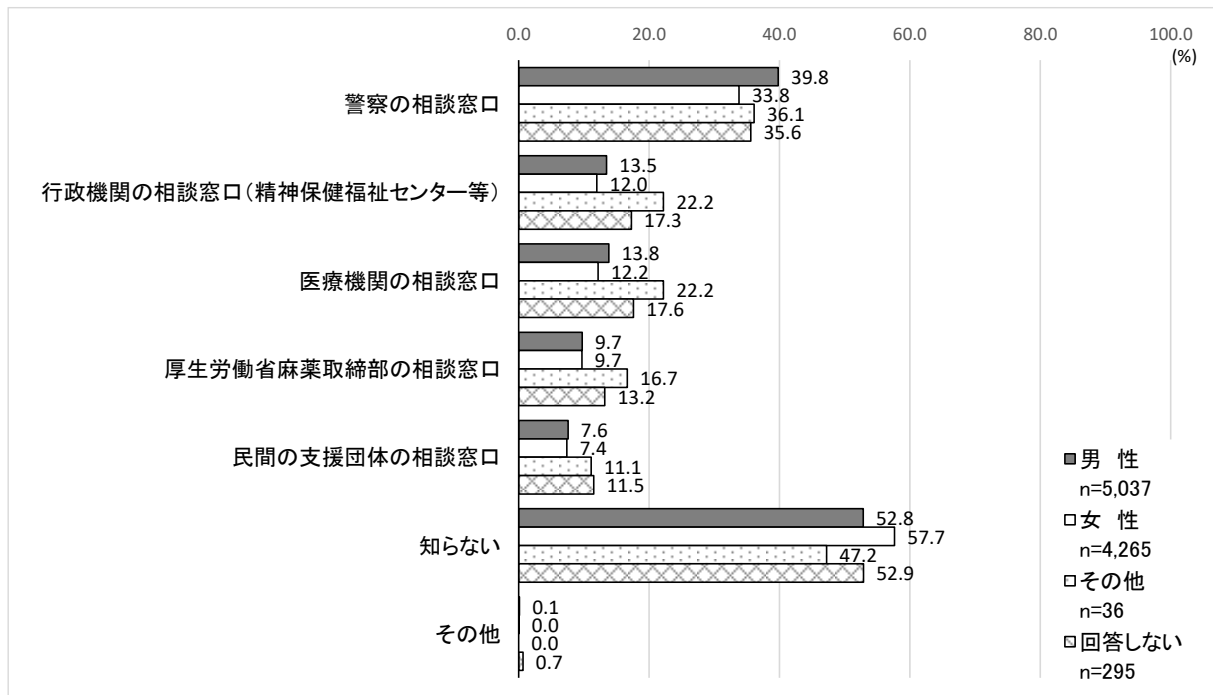
性別にみると、「男性」は「警察の相談窓口」の回答割合が他と比べてやや高い。一方、「回答しない」とした人は、その他の相談窓口の回答割合が他よりやや高い。

「その他」として記載された内容をみると、「窓口があるだろうとは思っていた」や「具体的には知らない(忘れた)」が、存在は知っている」との回答がある一方で、「大学の学生部」、「学校」など、具体的な窓口を挙げる回答もみられた。

図表 29 薬物に関する相談窓口の認知状況
 ≪3 か年調査比較≫



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査		令和6年度調査	
	全体		男性		女性		その他		回答しない		全体		全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
警察の相談窓口	6,185	37.3	2,006	39.8	1,442	33.8	13	36.1	105	35.6	5,281	34.7	4,667	33.6
行政機関の相談窓口(精神保健福祉センター等)	2,091	12.6	679	13.5	512	12.0	8	22.2	51	17.3	1,879	12.3	1,565	11.3
厚生労働省麻薬取締部の相談窓口	1,491	9.0	491	9.7	414	9.7	6	16.7	39	13.2	1,289	8.5	1,217	8.8
医療機関の相談窓口	2,030	12.2	697	13.8	520	12.2	8	22.2	52	17.6	1,937	12.7	1,725	12.4
民間の支援団体の相談窓口	1,278	7.7	382	7.6	316	7.4	4	11.1	34	11.5	1,211	8.0	1,014	7.3
知らない	9,152	55.2	2,661	52.8	2,459	57.7	17	47.2	156	52.9	8,758	57.5	8,116	58.4
その他	14	0.1	7	0.1	2	0.0	0	0.0	2	0.7	10	0.1	27	0.2
累計	22,241		6,923		5,665		56		439		20,365		18,331	

図表 30 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数
窓口があるだろうとは思っていた。	4
大学の学生部	3
具体的には知らないが、存在は知っている。	3
具体的なことは忘れたが、存在は知っている。	1
学校	1
家族の相談窓口	1
無効	1

(21) 薬物に手を出さないように注意するために知りたい情報

質問 20 あなたや、あなたのまわりの人がこれらの薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報は何か。(複数選択可)

まわりの人が質問 4 で提示した薬物に手を出さないように注意するために知りたいと思う情報に対する回答として、「薬物乱用による健康被害情報」が 61.0%と最も高く、次いで「薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報」が 44.5%、「国や地方公共団体の薬物乱用対策情報」が 15.0%、「医療機関や民間支援団体の取り組み情報」が 13.6%であった。

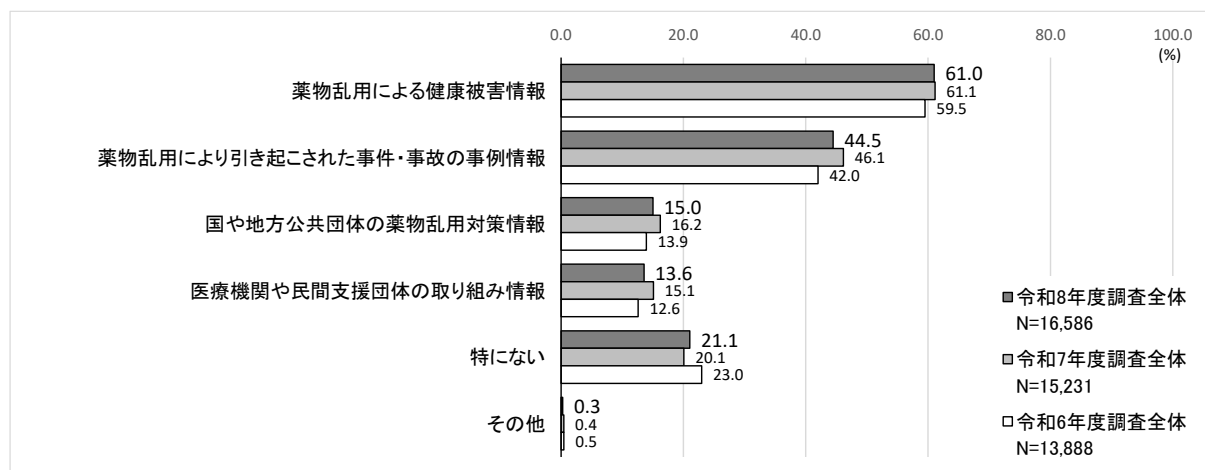
過去 2 年の調査においても同様の傾向となっている。

性別にみると、「女性」は、「薬物乱用による健康被害情報」と「薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報」の回答割合が、他に比べて高い。

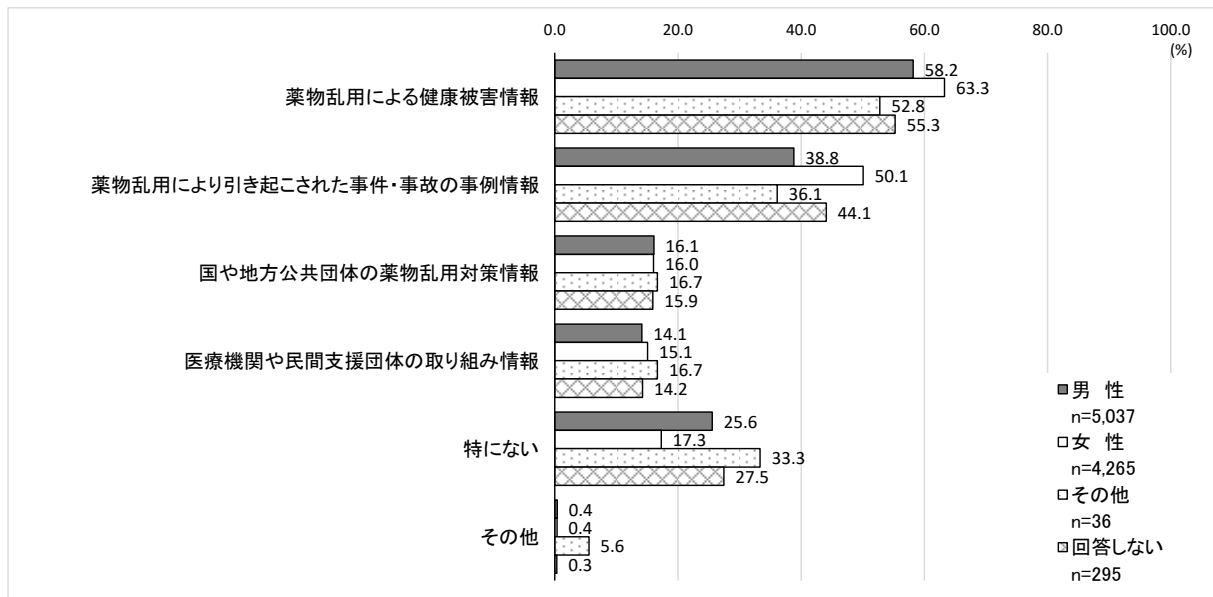
「その他」として記載された内容としては、「罰則・刑罰」や「薬物使用経験者の話」、「薬物使用経験者の実態」など薬物乱用の実態を知りたいとする回答がみられた。また、「勧められた時・踏みとどまるための対処法」や「勧誘の手口」、「薬物の入手経路」、「薬物の見分け方」など、誘惑を回避・対応するための具体的な方法を知りたいという回答もみられる。

図表 31 薬物に手を出さないよう注意するために知りたい情報

《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体		令和6年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない					
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231		13,888	
薬物乱用による健康被害情報	10,114	61.0	2,931	58.2	2,698	63.3	19	52.8	163	55.3	9,312	61.1	8,264	59.5
薬物乱用により引き起こされた事件・事故の事例情報	7,379	44.5	1,955	38.8	2,135	50.1	13	36.1	130	44.1	7,028	46.1	5,833	42.0
国や地方公共団体の薬物乱用対策情報	2,493	15.0	811	16.1	683	16.0	6	16.7	47	15.9	2,470	16.2	1,937	13.9
医療機関や民間支援団体の取り組み情報	2,249	13.6	712	14.1	642	15.1	6	16.7	42	14.2	2,298	15.1	1,752	12.6
特になし	3,492	21.1	1,287	25.6	737	17.3	12	33.3	81	27.5	3,057	20.1	3,194	23.0
その他	47	0.3	21	0.4	15	0.4	2	5.6	1	0.3	68	0.4	66	0.5
累計	25,774		7,717		6,910		58		464		24,233		21,046	

図表 32 「その他」の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
罰則・刑罰	8	法律	1
薬物使用経験者の話	6	取り締まりの強化	1
勧められた時・踏みとどまるための対処法	4	逮捕率	1
薬物使用経験者の実態	3	困っている人への支援	1
勧誘の手口	3	他の娯楽情報、代替手段	1
薬物使用後の人生	2	出回っている場所	1
薬物使用の理由	2	薬物の入手経路	1
薬物使用による周囲への影響	1	流通ルート	1
違法薬物の被害	1	薬物販売者・団体の情報	1
薬の作業	1	薬物の売上の行先	1
経済的損失	1	防げない	1
薬物の見分け方	1	その他	1
関わらないための情報	1	無効	1

(22) 薬物入手の可能性と可能な理由

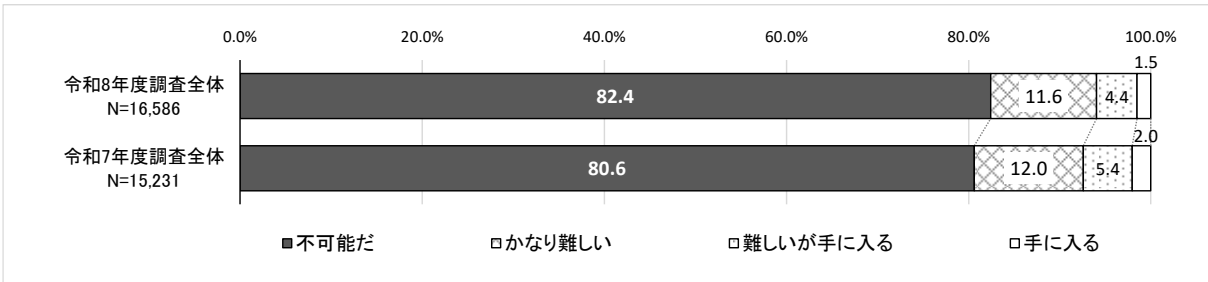
質問 21(ア) あなたは、これらの薬物を入手することが可能ですか。(1つ選択)
 【質問 21(ア)で「3 難しいが手に入る」または「4 手に入る」を選択した人だけお答えください。】
 (イ) 入手可能と考えた理由は何ですか。(複数選択可)
 【質問 21(イ)で「5 それ以外」を選択した人だけお答えください。】
 (ウ) それ以外に入手可能と考えた理由は何ですか。

質問 4 で提示した薬物の入手の可能性については、82.4%が「不可能だ」と回答した。「かなり難しい」が 11.6%である。一方で、「難しいが手に入る」が 4.4%、「手に入る」が 1.5%である。

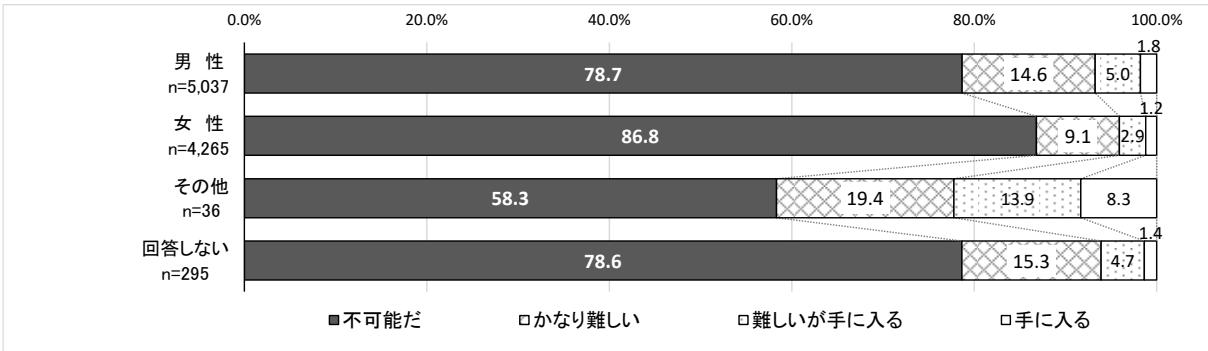
昨年度の調査と同様の結果となっている。

性別にみると、「不可能だ」とする割合は、「女性」が他に比べて高い。

図表 33 薬物入手の可能性
 ≪昨年度調査比較≫



≪性別比較≫



(設問順)

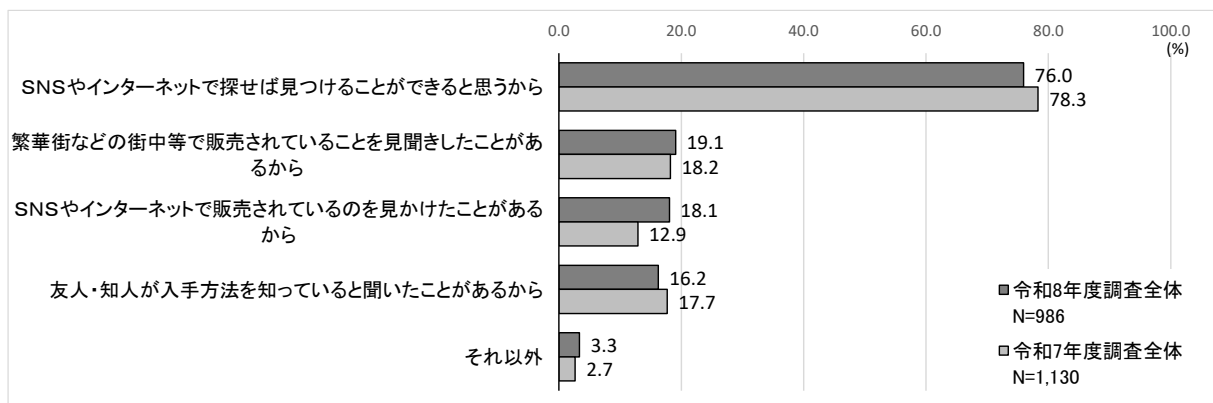
	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=9,633)								令和7年度調査全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0
不可能だ	13,672	82.4	3,963	78.7	3,703	86.8	21	58.3	232	78.6	12,280	80.6
かなり難しい	1,928	11.6	734	14.6	387	9.1	7	19.4	45	15.3	1,821	12.0
難しいが手に入る	736	4.4	250	5.0	123	2.9	5	13.9	14	4.7	820	5.4
手に入る	250	1.5	90	1.8	52	1.2	3	8.3	4	1.4	310	2.0

「手に入る（「難しいが手に入る」と「手に入る」の合計）」と回答した理由として、76.0%が「SNS やインターネットで探せば見つけることができるから」と回答している。「繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから」が 19.1%、「SNS やインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから」が 18.1%、「友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから」が 16.2%となっている。

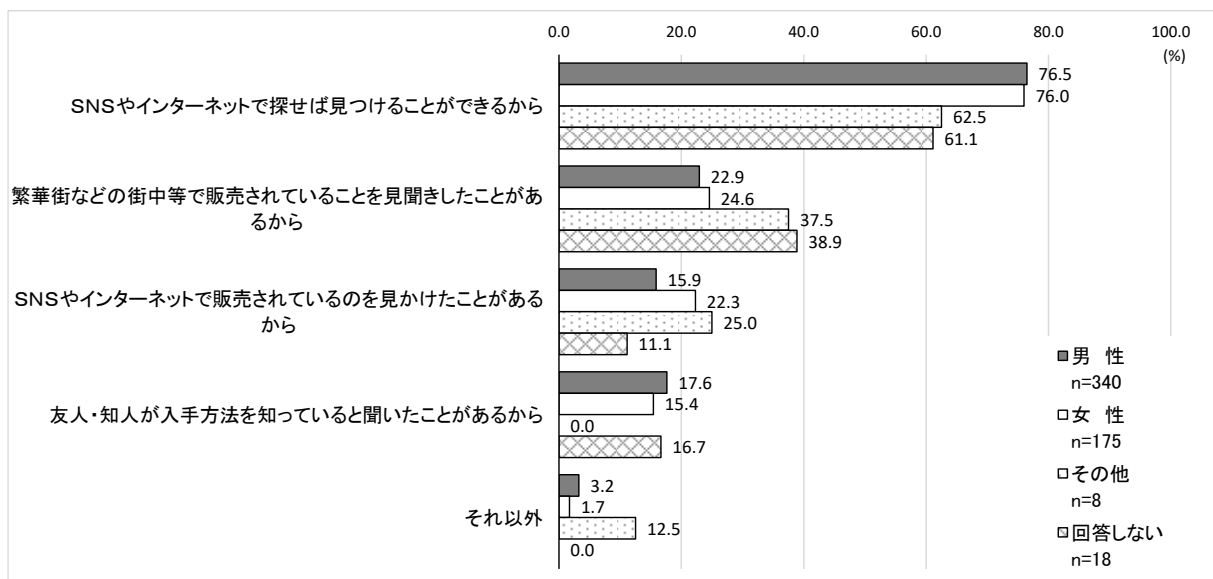
昨年度の調査と比較すると、「SNS やインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから」の回答割合が高くなっている。

性別にみると、「男性」は「友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから」の回答割合が他よりも高い。「女性」は「SNS やインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから」と回答割合が他に比べて高く、「回答しない」とした人は「繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから」の回答割合が他よりも高い。

図表 34 薬物入手が可能と考えた理由
 ≪昨年度調査比較≫



≪性別比較≫



(設問順)

	令和8年度調査 全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査 全体	
			男性		女性		その他		回答しない			
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	986		340		175		8		18		1,130	
SNSやインターネットで探せば見つけることができるから	749	76.0	260	76.5	133	76.0	5	62.5	11	61.1	885	78.3
SNSやインターネットで販売されているのを見かけたことがあるから	178	18.1	54	15.9	39	22.3	2	25.0	2	11.1	146	12.9
友人・知人が入手方法を知っていると聞いたことがあるから	160	16.2	60	17.6	27	15.4	0	0.0	3	16.7	200	17.7
繁華街などの街中等で販売されていることを見聞きしたことがあるから	188	19.1	78	22.9	43	24.6	3	37.5	7	38.9	206	18.2
それ以外	33	3.3	11	3.2	3	1.7	1	12.5	0	0.0	30	2.7
累計	1,308		463		245		11		23		1,467	

「それ以外」に入手可能と考えた理由として、「海外で入手できる」、「医療用薬物は入手可能」、「身近にシンナー・接着剤はある」や「知人が逮捕された」、「住んでいる地域でよく聞く」という回答が複数見られた。また、インターネット上の販売情報を理由として挙げる回答もみられた。

図表 35 選択肢以外に入手可能と考えた理由の記載主旨

記載の主旨	件数	記載の主旨	件数
海外で入手できる	8	授業で先生がネット販売を確認したと言った	1
医療用薬物は入手可能	2	ネットで情報が確認できた	1
身近にシンナー・接着剤はある	2	ダークウェブで販売	1
住んでいる地域でよく聞く	2	大麻を使っている人が多いという噂	1
知人が逮捕された	2	有機化学による可能性	1
身近なものになっている	2	病院で処方される可能性	1
知り合いが知ってそう	1	サークルでの使用可能性	1
街中に落ちていた	1	誰かに勧められる可能性	1
外国人使用者が多い	1	その他・無効	4

(23) 医薬品医療機器等法に基づく処罰の認知状況

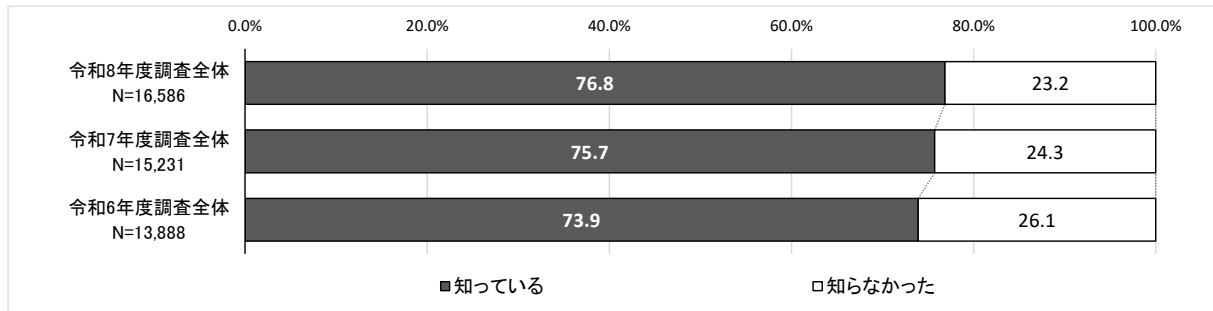
質問 22 あなたは、医薬品医療機器等法により、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッド、ゾンビたばこなど）の多くが、使ったり、持っていたりすると罰則の対象となる薬物になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

医薬品医療機器等法に基づき、危険ドラッグと称される薬物や商品（脱法ハーブ、合法アロマリキッド、ゾンビたばこなど）の多くが、使用や所持により罰則の対象となることの認知状況については、76.8%が「知っている」と回答した一方、23.2%は「知らなかった」と回答している。

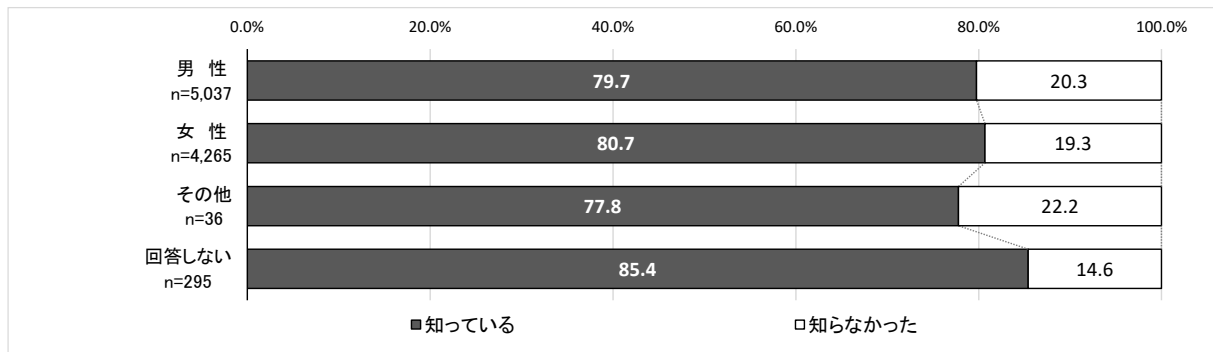
過去2年の調査と比較すると、「知っている」の回答割合はやや高くなっている。

性別にみると、「回答しない」とした人は、他に比べて「知っている」の回答割合が高い。

図表 36 医薬品医療機器等法に基づく処罰の認知状況
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査(N=9,633)								令和7年度調査全体		令和6年度調査全体	
	n	%	男性		女性		その他		回答しない		n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
知っている	12,746	76.8	4,017	79.7	3,441	80.7	28	77.8	252	85.4	11,532	75.7	10,265	73.9
知らなかった	3,840	23.2	1,020	20.3	824	19.3	8	22.2	43	14.6	3,699	24.3	3,623	26.1

(24) 市販薬の過剰摂取も薬物乱用の一種であることの認知状況

質問 23 あなたは、「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」が社会問題になっていることを知っていますか。（どちらかを選択）

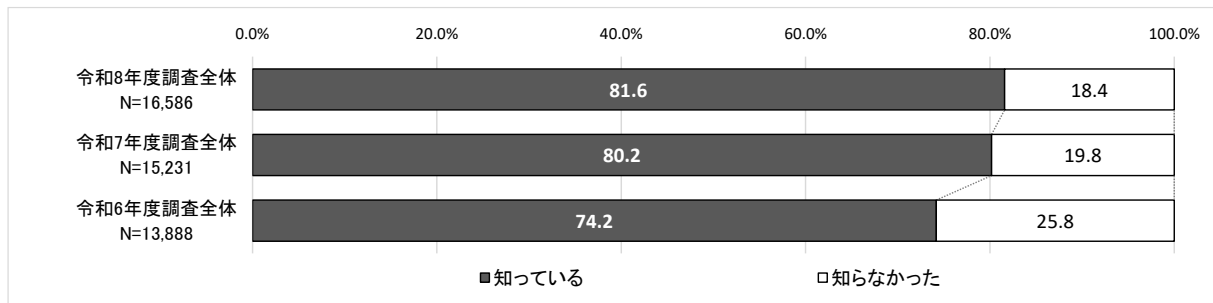
「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」とは、市販薬（かぜ薬・解熱剤・鎮痛剤・睡眠薬など）を定められた用法・用量以上に服用する（過剰摂取する）ことで、薬物への依存が高まるだけでなく、内臓機能障害や最悪の場合は心肺停止で死亡するケースもある、薬物乱用の一種です。

「市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）」が社会問題になっていることの認知状況については、81.6%が「知っている」と回答し、18.4%は「知らなかった」と回答している。

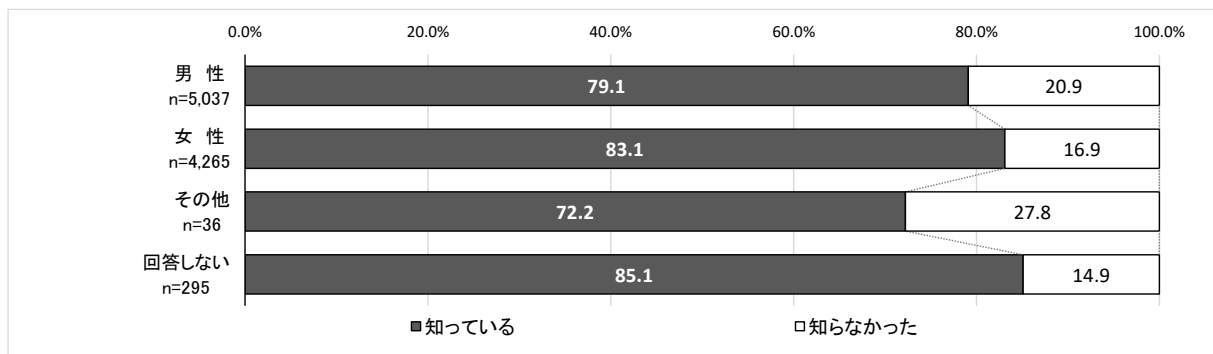
過去2年の調査と比較すると、「知っている」の回答割合はやや高くなっている。

性別にみると、「女性」および「回答しない」とした人は、「男性」より「知っている」の回答割合が高い。

図表 37 市販薬の過剰摂取に関する認知状況
《3 か年調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=9,633)								令和7年度調査全体		令和6年度調査全体	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
回答者数	16,586	100.0	5,037	100.0	4,265	100.0	36	100.0	295	100.0	15,231	100.0	13,888	100.0
知っている	13,532	81.6	3,984	79.1	3,544	83.1	26	72.2	251	85.1	12,211	80.2	10,301	74.2
知らなかった	3,054	18.4	1,053	20.9	721	16.9	10	27.8	44	14.9	3,020	19.8	3,587	25.8

(25) 「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」の認知状況

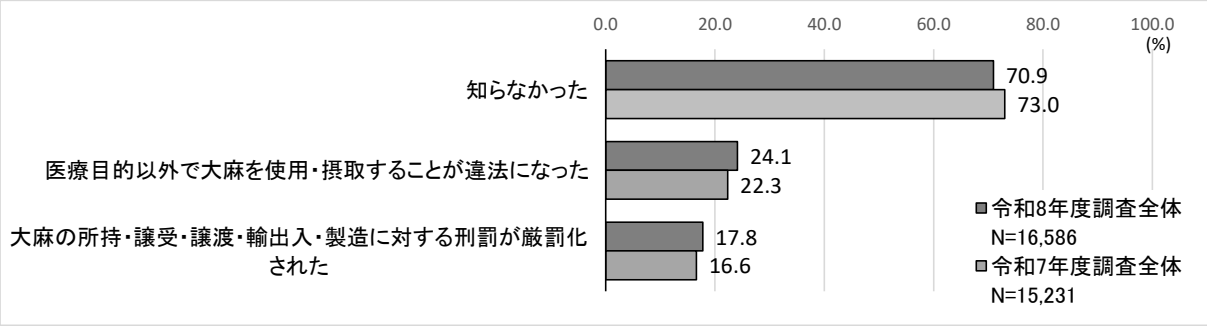
質問 24 2023 年 12 月に「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」が成立し、2024 年 12 月 12 日にその一部が施行されていますが、あなたはこの施行内容について知っていますか。(複数選択可)

「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」の一部改正、一部施行の認知状況については、70.9%が「知らなかった」と回答している。次いで、「医療目的以外で大麻を使用・摂取することが違法になった」が 24.1%、「大麻の所持・譲受・譲渡・輸出入・製造に対する刑罰が厳罰化された」が 17.8%となっている。

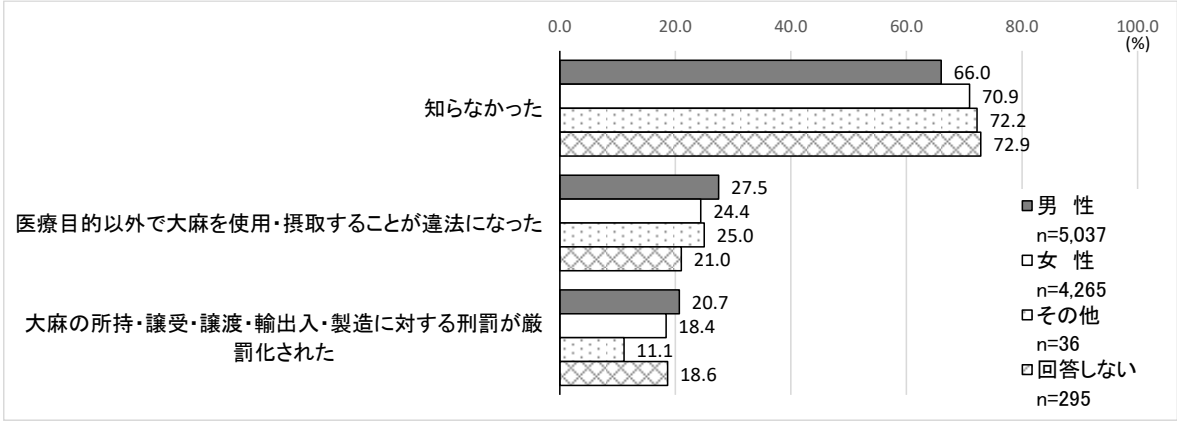
昨年度調査と比較すると、「知らなかった」の回答割合が低くなっている。

性別にみると、「男性」は他に比べて「知らなかった」の回答割合がやや低い。

図表 38 「大麻取締法及び麻薬及び向精神薬取締法の一部を改正する法律」の認知状況
《昨年度調査比較》



《性別比較》



(設問順)

	令和8年度調査全体		大学コンソーシアム大阪調査 (N=9,633)								令和7年度調査全体	
	n	%	男性 n	%	女性 n	%	その他 n	%	回答しない n	%	n	%
回答者数	16,586		5,037		4,265		36		295		15,231	
医療目的以外で大麻を使用・摂取することが違法になった	3,998	24.1	1,385	27.5	1,040	24.4	9	25.0	62	21.0	3,400	22.3
大麻の所持・譲受・譲渡・輸出入・製造に対する刑罰が厳罰化された	2,948	17.8	1,041	20.7	784	18.4	4	11.1	55	18.6	2,527	16.6
知らなかった	11,765	70.9	3,325	66.0	3,025	70.9	26	72.2	215	72.9	11,117	73.0
累計	18,711		5,751		4,849		39		332		17,044	

4. 調査結果を踏まえた共同 IR

(1) 共同 IR の実施目的

本調査は、会員大学の新入生を対象として、薬物に対する意識の実態を把握するとともに、調査を通じて薬物乱用防止の啓発を促進することを目的として実施している。2026（令和 8）年度は 33 大学 16,586 名から回答を得た。

2026 年度の調査結果については、薬物の危険性や違法性に関する基本的な認識が高い水準にある一方、薬物乱用問題に対する関心や自分事としての認識、SNS 等を通じた情報への対応、薬物に関する相談・支援行動等について、今後の啓発を検討するうえで着目すべき点がみられた。

そこで、大阪府内地域連携プラットフォームにおける共同 IR として、調査結果を会員大学及びプラットフォーム構成機関である自治体・産業界と共有し、それぞれの立場から意見を聴取するとともに、今後の薬物乱用防止啓発のあり方について分析・検討を行った。

共同 IR にあたっては、2026 年 9 月に大阪府内地域連携プラットフォーム分科会 1 構成大学・機関に対して調査結果を共有し、調査結果からみえる課題や今後必要と考えられる取組等について意見聴取を行った。あわせて、第 6 回分科会 1 において調査結果及び意見聴取結果を共有し、今後の取組の方向性について検討を行った。

(2) 調査結果からみた主な着眼点

2026 年度調査では、薬物使用について「どのような理由であれ、絶対に使うべきではない」と回答した割合は 90.4%、薬物の使用・所持・譲渡等について「罰せられる」と回答した割合は 94.6%となっており、薬物の危険性・違法性に対する基本的な認識は全体として高い水準にある。

一方、薬物乱用問題について危機感・不安感があるとする回答は 69.6%であり、約 3 割は明確な危機感・不安感を示していない。また、薬物の怖さについて「もっと知りたい」と回答した割合は 26.4%にとどまり、「どちらでもない」が 44.3%と最も高くなっている。こうした結果から、薬物の危険性や違法性について「知っている」ことが、必ずしも薬物問題への関心や自分事としての認識につながっていない可能性がうかがえる。

また、薬物に関する情報源として SNS を挙げる割合は、18.9%、22.7%、26.7%と 3 年連続で上昇している。さらに、友人の薬物使用を知った場合に「個人の自由であるので放っておく」と回答した割合が 13.2%みられるなど、情報を適切に判断する力や、自分または周囲の人が薬物問題に直面した際の具体的な行動につなげることも課題として考えられる。

これらを踏まえ、2026 年度調査では、今後の啓発を「知識」の提供にとどめず、学生自身による「判断」や具体的な「行動」へどのようにつなげていくかを、共同 IR における主な着眼点とした。

図表 39 2026 年度調査からみた主な着眼点

観点	調査結果からみえる状況	共同 IR における着眼点
関心・自分事化	基本的な拒否意識・法的認識は高い一方、明確な危機感を示さない学生や、更なる学習に積極的でない学生も一定数存在	「知っている」ことを、自分に関係する問題として捉えることにつなげる
情報環境	SNS を薬物に関する情報源とする割合が 3 年連続で上昇	SNS・インターネット上の情報を適切に見極める力を高める
判断・行動	周囲の薬物使用への対応や相談窓口の認知等に課題	勧誘等への対応や相談・支援につながる具体的な行動を促す

(3) 意見聴取からみえた主な論点

共同 IR の実施にあたり、会員大学ならびに大阪府内地域連携プラットフォームを構成する自治体・産業界に対し、2026 年度調査結果について意見聴取を行った。

意見聴取では、調査結果に対する着目点に加え、今後必要と考えられる薬物乱用防止の取組、現在の啓発における課題、調査の実施・活用方法等について意見を求めた。

寄せられた意見を整理すると、主に以下の論点が挙げられた。

① 薬物問題の「自分事化」

薬物の危険性や違法性についての認識は一定程度定着している一方、「自分には関係がない」「自分は関わらないから大丈夫」といった意識が存在する可能性が複数の大学から指摘された。

このため、危険性や違法性を一方向的に伝えるだけではなく、SNS を通じた勧誘、市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）、友人・知人からの誘いなど、学生生活の中で実際に起こり得る場面を取り上げ、薬物問題を身近な問題として考えることのできる啓発が必要との意見がみられた。

② SNS・インターネットを踏まえた情報リテラシー

薬物に関する情報源として SNS を挙げる学生が増加していることや、薬物を入手可能と考える理由として SNS・インターネットが挙げられていることから、デジタル環境への対応を課題とする意見が多くみられた。

SNS 等を単に危険な情報源として捉えるのではなく、薬物に関する誤情報や誘引を見極める力を育成するとともに、学生が日常的に利用する媒体を活用して正しい情報を継続的に届けることが必要との意見が挙げられた。

産業界からも、正しい知識を伝えることに加え、情報の真偽を見極める力や、勧誘・誤情報に接した際に「反応しない」「相談する」「距離を置く」といった行動を身につける必

要性が指摘された。

③ 知識から具体的な判断・行動につなげる啓発

薬物の健康被害や犯罪性に関する情報に加えて、「勧められた際にどう断るか」「友人の薬物使用を知った場合にどうするか」など、実際の場面を想定した情報を提供する必要性が指摘された。

薬物乱用防止啓発について、知識の習得そのものを目的とするのではなく、学生が問題に直面した際に適切に判断し、行動できることまでを視野に入れる必要があると考えられる。

④ 相談窓口・支援につながる情報の充実

薬物に関する相談窓口を「知らない」とする学生が過半数を占めていることについて、複数の大学から課題として指摘があった。

学内の保健・学生相談部門をはじめ、警察、行政、医療機関等の相談窓口について、単に存在を周知するだけでなく、「どのような場合に」「どこへ」「どのように相談すればよいか」を具体的に示すことや、相談することへの心理的なハードルを下げる工夫が必要との意見がみられた。

⑤ 継続的・段階的な啓発

新入生ガイダンス等における啓発だけでは一過性になりやすいことから、在学期間を通じた継続的な情報提供が必要との意見がみられた。

自治体からも、新入生オリエンテーションや学園祭等における大学との連携事業について、調査結果からみえた課題に即して内容を更新していくことが提案された。

また、産業界からは、入学時に加え、夏季休暇前、学園祭・イベント前、就職活動や就業開始前など、リスクが高まりやすい時期に繰り返し啓発することが有効との意見が示された。

⑥ 調査結果の活用と大学間での取組共有

本調査を継続して実施することで経年変化を把握するとともに、各大学が調査結果を自大学の啓発活動の改善に活用できるようにすることが重要との意見がみられた。

具体的には、各大学における効果的な啓発事例や教材等の共有、全体傾向との比較、大学規模等の観点を踏まえた分析、2年生以降の意識変化の把握など、共同 IR として調査結果をさらに活用していくための提案があった。

また、本調査への回答自体を啓発の機会として捉え、回答後に相談窓口や薬物に関する情報を提示するなど、「調査」と「啓発」をより有機的に結びつけることについても意見がみられた。

(4) 共同 IR を踏まえた今後の方向性

2026 年度調査及び共同 IR を通じて、薬物の危険性・違法性に関する基本的な認識は全体として高い水準にある一方、それらの知識を自分自身に関わる問題として捉え、実際の場面において適切に判断し、行動することにつなげていくことが今後の重要な課題として確認された。

今後の薬物乱用防止啓発においては、これまでの危険性・違法性に関する知識の提供を継続しつつ、SNS・インターネット上の情報を適切に判断するための情報リテラシー、薬物への勧誘等に直面した際の対応、周囲の人が問題を抱えた場合の相談・支援行動など、学生が具体的な場面で活用できる内容を充実させることが必要である。

また、新入生への啓発にとどまらず、学生生活の節目等を捉えた継続的な情報提供や、学生が日常的に接するデジタル媒体を活用した啓発についても検討していく必要がある。

大阪府内地域連携プラットフォームでは、今後も本調査を継続するとともに、調査結果を会員大学、自治体及び産業界等で共有・分析し、各大学における取組事例等も共有しながら、より効果的な薬物乱用防止啓発につなげていく。